⑹ 昆虫類 ⑦ コウチュウ目

コウチュウ目昆虫は日本には1万種以上が生息し、埼玉県からはこれまでに113科3,562種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた3,488種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約5%にあたる171種をレッドリスト掲載種とした。

これまでのコウチュウ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版の21種、改訂版の35種、前版の128種、そして本書の171種と、絶滅を危惧すべき状況にあるコウチュウ目昆虫は確実に、しかも急激に増加していることが見てとれる。

今回の掲載種が増加した原因として挙げられるものは、先ず、国の示したレッドリストの最新版で、多くのコウチュウ類が追加され、その中に県内に分布が既に確認されており、今回の調査でも県内での希少性が確認されたものが多かったことである。それらは国のリスト中で情報不足DDとされたものも含め24種におよび、主に水生コウチュウ類の種が占めている。しかし、中にはコガムシ（ガムシ科）などのように、県内では比較的普通に産し、危機的状況とは言えずリストに含めなかった種もある。

また、国のレッドリストに掲載は無いものの、国内、特に近隣都県での生息状況も踏まえ、レッドリストに取り上げるべき種として追加したものも18種を数えた。これらの中には最近の調査で県内から新たに確認された種が多く、ヤツメアリヅカムシ（ハネカクシ科）やペンギンダイコクアリヅカムシ（ハネカクシ科）、フトネクイハムシ（ハムシ科）のように、河川敷等に残る低湿地や開放的な草原環境に限って生息し、近年急速にその環境が失われつつあるもの、また、ダイセツマルトゲムシ（マルトゲムシ科）やコガネコメツキ（コメツキムシ科）、ハイマツマキムシモドキ（マキムシモドキ科）など、亜高山帯以上の山岳地帯に分布の中心を置き、県内では県境付近の稜線沿いとその周辺の高所にのみ分布が限られ、今後、地球温暖化やニホンジカ等野生動物による植物相の採食影響等で生息が危ぶまれる種などが含まれる。

また、今回、前版からレッドランクを変更した種が13種あり、いずれも県内での生息状況が悪化、あるいは絶滅したと思われる状況を確認した種である。それらの生息状況の悪化を確認する手段として、県内における過去と近年の記録の比較から浮かび上がってくる生息状況の変化を把握し、既知産地やその周辺地域で生息が予想される環境での現地調査、および近隣都県における採集記録や新旧RDBの記述の比較なども参考にしながら総合的に判断した。

この中にはオオミズスマシ（ミズスマシ科）やクビボソコガシラミズムシ（コガシラミズムシ科）といった水生コウチュウ類、フタモンマルクビゴミムシ（オサムシ科）、キベリマルクビゴミムシ（オサムシ科）、チョウセンゴモクムシ（オサムシ科）、チビアオゴミムシ（オサムシ科）、ガガブタネクイハムシ（ハムシ科）、スゲハムシ（ハムシ科）といった河川敷の水辺周辺や低湿地、乾燥した荒れ地の草原環境に生息する種が挙げられる。

今回、新たに絶滅種と判断したのはコガタノゲンゴロウ（ゲンゴロウ科）、カワラハンミョウ

（オサムシ科）、ケスジドロムシ（ヒメドロムシ科）の３種であり、いずれも水辺に関連する種で、県内における河川等の水辺環境の急激な変化が影響していると思われる。その原因として考えられるのは、ゲリラ豪雨や大型台風による水位の急激な増加、それらに対応するための河川堤防工事等による生息環境の消失、外来植物の増加による植生の変化、水路の護岸工事等に伴う生息環境の消失、水田における効果・持続性の高い農薬の導入、レジャー目的での河川敷への自家用車の頻繁な侵入等が挙げられる。いずれも近年急速におこった環境の変化であり、そうした状況に希少性の高い種が巻き込まれ、絶滅したと考えられる。

これら３種以外にも、近年生息が全く確認できず、絶滅か、それに近い状況にある種がいくつも確認されているため、今後もランクの変更や絶滅宣言を出さざるを得ない種は増えるものと思われる。

［付記］次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、上野ほか（1985）、黒澤ほか（1985）、林ほか（1984）、井村・水沢（2013）、森・北山（2002）、川井ほか（2005）、小林・松本（2010）、酒井・藤岡（2007）、大桃・福富（2013）、木元・滝沢（1993）、大林・新里（2007）、および環境省（2015）を参照した。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕**コガタノゲンゴロウ**
〔学　名〕*Cybister tripunctatus orientalis* Gschwendtner

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　VU
指定状況　－

【形　態】体長 24 ～ 29㎜。体型は長卵型。後脚はよく発達し遊泳毛が目立つ。体色は緑色か褐色を帯びた黒色、側縁に黄色帯を持つ。全体に光沢が強い。腹面は黒褐色で腹部 3 ～ 5 節の端部に黄褐色紋を持つ。

【国内分布】本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】止水性であり、湖沼、ため池、耕作放棄水田、水田の畔（掘り上げ）などに生息し、水生植物が豊富で餌となる小動物や昆虫類の多い場所で得られる。

【県内での生息状況】県内では低地帯から低山帯にかけて記録が散見されることから、かつては広く分布したものと推測される（吉越ほか，1998）。近年の記録が全くなく、既知産地においても確認されないことから（埼玉県，2008）、すでに絶滅したと推測される。

【特記事項】本種をはじめとした大型ゲンゴロウ類は愛玩飼育用として広く流通していることから、近年の記録がない地域において採集された場合には飼育個体の逸出や人為的な移入を疑うべきである。本種は九州地方を中心に生息地や個体数が増加しており、地域によっては復活傾向にある。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕**アイヌハンミョウ**
〔学　名〕*Cicindela gemmata aino* Lewis

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】体長 16 ～ 17mm、体は縦長で厚く、前胸が白色剛毛に覆われること、オスの大顎は端部が幅広いことにより、良く似た他の種と識別できる。色彩は黒灰緑色で、上翅に乳白色の紋がある。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】低山帯から台地・丘陵帯にかけての河川の上流から中流域で、川幅が狭い河原に生息。流路が蛇行し、植生が疎で、日当たりが良く、幼虫が大水の際にも水没しない箇所を好む傾向がある。

【県内での生息状況】県内の 3 つの記録のうち、旧浦和市（現さいたま市）、旧大滝村（現秩父市）白岩山～三峰山（いずれも埼玉県立蕨高等学校生物クラブ，1965）については、前者はニワハンミョウ、後者はミヤマハンミョウの誤同定と考えられる。旧神川村（現神川町）（斎藤，1978）は生息環境から本種と思われるが、現在ではキャンプ場・公園となっており、本種の生息に適した環境が保存されていないため絶滅したものと思われる。その後、周囲を含めた調査でも新たな生息地は確認できない。

【特記事項】関東各都県のうち、千葉県内では現在でも生息が確認されており（中村，2014 など）、車両が河原に進入できないなど人為的撹乱の進まない環境下では安定して生息している状況である。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕**カワラハンミョウ**
〔学　名〕*Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky)

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　EN
指定状況　－

【形　態】体長 14 ～ 17mm、体は縦長で厚く、前胸は剛毛に覆われ、脚が非常に長い。色彩は、上翅は黒色で乳白色の紋があり、発達して白色の割合が多い個体も見られる。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】主に台地・丘陵帯から低地帯にかけての河川や海岸、あるいは火山地帯に発達した砂丘の環境に生息。植生が皆無かあるいは疎で、日当たりが良く、河川周辺では幼虫が大水の際にも水没しない箇所に生息するため、そうした環境が残る箇所に限定される。

【県内での生息状況】古い記録としては、荒川流域の荒川村（現秩父市、日野沢）、秩父市（浦山川流域）、長瀞町、皆野町（日野沢）、寄居町、利根川流域の羽生市、高麗川流域の旧日高町（現日高市）があるが（吉越ほか，1998）、1980 年代に寄居町の荒川河川敷で生息が確認されたのを最後に近年の正確な同定に基づく生息確認例はない。その後、県内全域の詳細な調査にも関わらず再発見できない状況であり、絶滅したものと思われる。

【特記事項】関東各都県のうち、千葉県と茨城県ではわずかに太平洋側の海岸で生息地が残されている状況で、生息状況を示す写真がインターネット上でも多く見受けられる。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **キバナガミズギワゴミムシ**
〔学　名〕 *Armatocillenus* (*Desarmatocillens*) *yokohamae* (Bates)

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 4.2mm 程度、体型は細長く、頭部と大顎が発達し、前胸は前縁が幅広い。後翅が発達し良く飛翔する。色彩は黒色で、口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低地帯で、河川の河口付近の汽水域から海岸にかけての砂礫地に生息する。

【県内での生息状況】 古い記録として旧浦和市（現さいたま市）の田島ヶ原に記録があるが（梶村，1955）これが唯一であり、その後 50 年以上記録が無い。生息環境も大きく変化していることから、絶滅したものと思われる。

【特記事項】 関東各都県では、東京湾に注ぐ河川の河口付近に現在でも生息が確認されている。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **ツヤキベリアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Chlaenius* (*Chlaenites*) *spoliatus motchulskiyi* Andrewes

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　VU
指定状況　－

【形　　態】 体長 15.5 ～ 16mm、体型は細長く厚味があり、頭部は複眼が良く発達し、前胸は側縁が強く張り出す。色彩は全体が緑～赤味がかった銅色光沢が強く、口器、触角、脚部ならびに上翅側縁は淡黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、河川敷や池沼周辺、水田跡等の低湿地に生息し、産地は極めて局所的である。ヨシ原等の地表面で、水際に近い箇所において、夜間活動し、素早く走り回る。越冬は崖などの土中で行われる。

【県内での生息状況】 梶村（1955）による荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）と戸田市の記録が最初で、その後、長瀞町産の 1951 年採集の標本（埼玉県, 2002）、近年では、筑波の土生コレクションを整理した目録中に蕨市産の 1956 年採集の標本、また Bushuu-nakata（現在地不明、戸田市美女木の外仲田と思われる）産の 1952 年採集の標本が確認された（吉武ほか, 2011）。しかしながら最後の記録以後 50 年以上再発見されておらず、荒川流域の既知産地の環境の変化、周辺地域の状況から考えて、県内では絶滅したものと思われる。

【特記事項】 ユーラシア大陸には別亜種が広く分布する。また、関東各都県では千葉県に現在でも産地が残されているが、この地域でも極めて限られた箇所にのみ生息し、絶滅寸前の状態である。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **オオヒラタトックリゴミムシ**
〔学　名〕 *Brachyodes virens* (Wiedemann)

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　CR
指定状況　－

【形　　態】 体長 15.5 ～ 17mm、体型は細長く、頭部は複眼は発達し、前胸は幅広で前縁に向かってすぼまり、上翅も幅広く、後方に向かってやや広がり、全体の形状がまるで徳利のようである。体色は全体が黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、周囲を森林に囲まれた田んぼや河川敷周辺の湿地に生息するものと思われ、こうした環境付近のライトトラップで得られている記録が多い。

【県内での生息状況】 古い記録として、戸田市と旧浦和市（現さいたま市）の 1950 年代以降の記録があり（吉越ほか , 1998）、この記録の基になったものと思われる標本の一部が筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中に再録されている（吉武ほか ,2011）。また、近年小川町と旧妻沼町（現熊谷市）の 1960 年代の標本が記録されたが、いずれにしても近年の記録は一切なく、既知産地の環境も大きく変わってしまっていること、全国的にも同様の状況であることなどから、既に絶滅したものと思われる。

【特記事項】 関東各都県では、山梨県内で近年でもわずかに産地が確認されている。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **オオアオホソゴミムシ**

〔学　名〕 *Dendrocellus geniculatus* (Liang)

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 8.8 ～ 10.2mm、体型は細長く、頭部は大顎が著しく伸長し先端部が曲がる。前胸は筒状、体表面は全体が長い毛で覆われる。体色は青緑色の金側光沢を帯び、口器、触角、脚部は赤褐色で、触角第 1 節と腿節の先端は黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低山地から低地帯にかけて、谷間の田んぼ周辺や河川敷等の草原環境に生息し、多くが灯火で得られている。オオヒラタトックリゴミムシと共に得られていることが多い。

【県内での生息状況】 古い記録として、旧浦和市（現さいたま市）尾間木（梶村，1955）と利根川流域の旧北川辺町（現加須市）麦倉（矢島，1974）、また筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中に梶村の記録の基になったと思われる浦和産の 2 頭が再録されているが（吉武ほか , 2011）、近年の記録は一切ない。生息環境変化により絶滅したものと思われる。

【特記事項】 日本産種は Niang & Kavanaugh（2007）により 2 種が存在することが明らかとなったが、筑波の土生コレクション中の浦和産の個体は上翅の長さ等から明らかに *D. genuculatus* である。県内の他の記録が全て本種とは限らないが、*D. confusus* と同定される個体が無いことから、暫定的に全て前者として扱っておく。

科　名　ヒメドロムシ科

〔和　名〕 **ケスジドロムシ**

〔学　名〕 *Pseudamophilus japonicus* Nomura

埼玉県(2018)　EX　環境省(2015)　VU

指定状況　－

【形　態】 体長 4.8 ～ 5.3㎜。体型は細長く厚味がある。上翅表面の奇数間室には黄色から黄褐色のビロウド状の毛が縦方向に生じ、和名の「毛筋」の由来となっている。脚は長く、跗節は発達し爪も長い。体色は暗褐色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 流水性で河川の上流から下流域にかけて生息し、流れのある水底に沈んだ流木や川辺の水中に露出したヨシやツルヨシなどにしがみついており、生息条件がよい所では多産することがある。河川本流だけではなく支流のような小規模な流れや小川、水路にも生息する。

【県内での生息状況】 県内では低地帯の久喜市から 1 例が知られるのみであり（吉越ほか，1998）、追加記録はなく、新産地も発見されていない（埼玉県，2008）。水質がよく水底を有機物が覆っていない河川で、餌となる流木等が多く供給されないと本種は生息できないことから、県内においては生息可能な河川がほぼなく絶滅したと考えられる。

【特記事項】 国内に分布するヒメドロムシ科の中で特に体長が大きく、最大種である。関東地方では最近の記録はほとんど見られないが、群馬県では現在でも僅かに生息が確認されている（茶珍，2015）。

科　名　ミズスマシ科

〔和　名〕 **オオミズスマシ**

〔学　名〕 *Dineutus orientalis* (Modeer)

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　態】 体長 7 ～ 12mm、体型は長円形で、前胸は後縁中央が後方へ出る。上翅側縁後方、翅端に棘がある。色彩は、黒色で虹色光沢を伴った銅色光沢があり、前胸、上翅側縁ならびに脚部は黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、池沼や水を張った田んぼなど、止水域に生息する。昔ながらのため池でコンクリート護岸されていない環境に生息し、水面に浮かんだ状態でグルグルと回るようにすばやく移動し、人が近づくなどすると水中に逃げ込む。

【県内での生息状況】 旧浦和市（現さいたま市）西堀（梶村，1961）と秩父市の赤穂木池（福嶋・長島，1987）、県東部の江戸川沿いの池沼（埼玉県，2008）で記録され、江戸川沿いの標本は旧大利根町（現加須市）と松伏町のものとして正式に記録された（新井ほか，2016）。また旧庄和町（現春日部市）（亀澤，2015）の記録もある。江戸川沿いの既知産地の環境は悪化しており、現在ではほとんど見られない。

【特記事項】 江戸川流域では止水域環境が点在することから、今後新たな産地の発見の可能性もある。

科　名　ミズスマシ科
〔和　名〕 **ミズスマシ**
〔学　名〕 *Gyrinus japonicus* Sharp

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) VU
指定状況 －

【形　態】 体長 6.0 ～ 7.5㎜。体型は卵型。上翅に 11 条の点刻列を持つ。オス交尾器中央片の先端は幅広く切断状となる。背面は黒色で強い金属光沢を持ち、屋外では銀色に見える。脚は黄褐色から赤褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、低地帯から山地帯にある水質が良好で水生植物の豊富な湖沼やため池、砂防ダム、水田、河川の淀みなどに生息し、水面を群泳する。特に水質のよい開けた環境を好む。

【県内での生息状況】 県内では大宮台地、台地・丘陵帯、低山帯にかけての記録が散見されるため（吉越ほか，1998；新井ほか，2016）、かつては広く分布していたと考えられる。近年ではほとんどの場所で確認できず、確実な産地は秩父市の 1 ヶ所のみである（新井ほか，2016）。水量の減少や生息地の周辺環境悪化が急速に進行している状況である。

【特記事項】 本種を含む日本産ミズスマシ属は近縁種が多く形態がよく似ているため、確実な同定にはオス交尾器を実検する必要がある。外部形態だけでは中間的な特徴を示す個体もおり同定は困難である。ごく普通に見られた代表的な水生甲虫ながら、近年、全国的に激減している（環境省，2015）。

科　名　コガシラミズムシ科
〔和　名〕 **クビボソコガシラミズムシ**
〔学　名〕 *Haliplus japonicus* Sharp

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 2.8 ～ 3.4㎜。体形は比較的細長い。前胸背板の基部から中央部に向かう一対の縦条を持つ。上翅は明瞭な点刻列を有する。体色は淡黄色。上翅は不明瞭な黒紋を生じる。上翅の黒紋の発達具合には個体変異がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 湧水や伏流水が供給されている湖沼や河川のほとんど流れがない場所に生息し、水草類や抽水植物の豊富な地点で比較的まとまった数の個体が確認されることが多い。

【県内での生息状況】 県内では低地帯の深谷市利根川流域、台地・丘陵帯の西端部にある長瀞町の荒川流域、低山帯の秩父市荒川流域で記録されているが（埼玉県，2008）、前述の長瀞町の産地を除いては環境が大きく変化したため本種が確認できない状況が続いている（新井ほか，2016）。県内の生息環境は急速に悪化している。

【特記事項】 近縁種のカミヤコガシラミズムシ *H. kamiyai* とは上翅の斑紋パターンにより区別される。カミヤコガシラミズムシは上翅の黒条が太くなり中央付近で十字状に発達する（新井，2005c）。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕 **マルガタゲンゴロウ**
〔学　名〕 *Graphoderus adamsii* (Clark)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) VU
指定状況 －

【形　態】 体長 12 ～ 14.5mm、体型は丸みが強く厚味があり、体色は黄褐色、頭部の複眼基部附近、前胸の中央前縁と中央基部に黒色紋があり、頭部の黒色紋内には 1 対の黄色紋がある。上翅は全体がかすれた黒色で、側縁は明るい。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、河川敷や田んぼ周辺の湿地環境にできた水溜まりや池沼に生息し、灯火にも飛来する。

【県内での生息状況】 旧日高町（現日高市）の聖天院前の池、狭山市、旧大宮市（現さいたま市）の二ツ宮、旧浦和市（現さいたま市）の原山と駒場、戸田市の荒川、春日部市蛭田など古い記録があり（吉越ほか，1998）、近年では春日部市新宿新田の江戸川河川敷で灯火に飛来した個体の記録（亀澤, 2011d）が唯一である。隣接する千葉県白井でも近年確認されており、江戸川流域には少ないながら生息しているようである。

【特記事項】

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **クロゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Cybister brevis* Aubé

指定状況　－

【形　態】 体長 20 ～ 25 mm。体型は卵型。体色は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で、翅端部付近に一対の不明瞭な黄褐色紋を有する。前・中脚は黄褐色から暗褐色で、後脚は暗褐色から黒褐色。腹面は黒褐色で腹部 3、4 節の端部に黄褐色紋を持つ。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、湖沼、ため池、耕作放棄水田、水田の畔（掘り上げ）などに生息し、水生植物が豊富で餌となる小動物や昆虫類の多い場所で得られる。

【県内での生息状況】 県内では低山帯の秩父地方の秩父市や横瀬町の池などで得られた記録が見られるが（吉越ほか，1998）、いずれも古い記録のみで近年の確実な産地は確認されていないため、極めて危機的な状況にあると考えられる（埼玉県，2008）。県内における分布域は元々限定されていた種であると考えられる。

【特記事項】 本種をはじめとした大型ゲンゴロウ類は愛玩飼育用として広く流通していることから、近年の記録がない地域において採集された場合には飼育個体の逸出や人為的な移入を疑うべきである。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **ゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Cybister chinensis* Motschulsky

指定状況　－

【形　態】 体長 34 ～ 42㎜の大型種。体型は卵型。後脚はよく発達し遊泳毛が目立つ。体色は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で、体側縁に黄色帯を持つ。オスは光沢が強い。腹面は主に黄色から黄褐色黒褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、湖沼、ため池、耕作放棄水田、水田の畔（掘り上げ）などに生息し、水生植物（ヒルムシロやオモダカなど）が豊富な場所で得られる。餌となる小動物や昆虫類の多い場所でないと生息できない。

【県内での生息状況】 県内では低地帯から低山帯にかけて記録が見られるが（吉越ほか，1998；埼玉県，2008）、近年の確実な記録はなく絶滅か絶滅寸前の状態と考えられる（新井ほか，2016）。低山帯において目撃情報があるものの、飼育個体の人為的な移入の可能性もあり、今後の動向に留意しておく必要がある。

【特記事項】 本種をはじめとした大型ゲンゴロウ類は愛玩飼育用として広く流通していることから、近年の記録がない地域において採集された場合には飼育個体の逸出や人為的な移入を疑うべきである。成虫幼虫ともに大量の食物を必要とするため、生物量の多い場所でないと生息できない。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　EN

〔和　名〕 **キベリマルクビゴミムシ**

〔学　名〕 *Nebria livida angulata* Banninger

指定状況　－

【形　態】 体長 13 ～ 16.5mm、体は縦長で平たく、前胸背板は心臓型、上翅側縁は直線状。第 3 間室に剛毛孔点があり、良く似た他の種とは容易に識別できる。色彩は赤褐色で、頭部は黒色、背面に一対の赤色紋がある。前胸背板基部と上翅中央部は黒色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての大～中規模の河川周辺に生息し、里山環境の保全された田畑の周囲などで見つかる。

【県内での生息状況】 古い記録としては荒川流域の長瀞町から旧浦和市（現さいたま市）までの各地、高麗川流域の旧日高町（現日高市）があるが（吉越ほか，1998）、近年の生息確認例はない。

【特記事項】 関東各都県のうち、神奈川県内では近年でも生息が確認されているが（渡辺，2012）、記録地の状況から見ると河川周辺の里山環境が保全されている箇所に生息するようである。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　EN

〔和　名〕 **フタモンマルクビゴミムシ**

〔学　名〕 *Nebria pulcherrima pulcherrima* Bates

指定状況　－

【形　態】 体長 11 ～ 12.5mm、体は縦長で平たく、前胸背板は心臓型、上翅側縁は丸みを帯びる。脚と触角は細長い。体色は脚は全体が黄赤褐色で、上翅は中央よりやや後方に黒色紋を生じ、個体により変異がある。頭部に黒色紋は無い。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての比較的大規模な河川の礫質河原に生息し、水際附近の石の下に見られる。

【県内での生息状況】 県内の古い記録としては、荒川流域の長瀞町、寄居町、旧吹上町（現鴻巣市）、桶川市、高麗川流域の旧名栗村（現飯能市）があり（吉越ほか，1998）、近年では利根川流域の深谷市で確認されているが（新井，2004d）、今回の利根川流域等での詳細な調査でも生息確認できなかった。生息地は局所的、かつ個体数もわずかであると推測され、関東各都県での危機的な生息状況も踏まえると、生息が危ぶまれる状況である。

【特記事項】 生息環境周辺の河川域内で大型重機による作業が実施されており、生息に影響があるものと思われる。また、近年のゲリラ豪雨等による河川内の撹乱も、生息環境への土砂の堆積や植生の変化等環境変化が著しく、生息に影響があるものと思われる。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **アカガネオサムシ本州亜種**

〔学　名〕 *Carabus granulatus telluris* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 20 ～ 25mm、体は細長く厚味があり、前胸は幅広で後角はやや張り出し、上翅には特徴的な印刻がある。個体差はあるが、後翅が縮小し、飛翔能力を欠く。色彩は全体が黒色でわずかに緑色味のある鉄色の光沢を帯びる。

【国内分布】 本州（東日本）

【主な生息環境】 低地帯の湿地に生息し、周囲に森林があり、年間を通して湿潤な環境が保たれている状況を好む。越冬は湿地周辺の崖や朽木中で行われることから、そうした環境が存在することも必要である。

【県内での生息状況】 低地帯でも荒川周辺より東側で主に分布し、以前より川口市、旧浦和市（現さいたま市）、上尾市、蓮田市、伊奈町で記録があり（吉越ほか，1998）、最近になって渡良瀬川流域の加須市（井上，2016a）と江戸川流域の春日部市（亀澤，2010a など）でも記録された。これは上流域に位置する渡良瀬遊水地が本種の好適な生息地であり、大水等の際に個体群が補充されている可能性もある。また、過去に記録のある大宮台地周辺の湿地環境が乾燥化等により変化、その後生息が確認できない等深刻な状況も見受けられる。

【特記事項】 関東地方では現在、千葉県北部の平野部から栃木県、茨城県にかけて局所的ではあるが生息地が残されており、埼玉県の生息地はこの分布域の西端にあたるものである。過去に記録のある神奈川県では既に絶滅したものと思われる。また、長野県から東北地方各地に点在する生息地とは隔絶されており、遺伝的交流が無い状況である。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ハマベミズギワゴミムシ**

〔学　名〕 *Bembidion* (*Asioperyphus*) *collutum semiluitum* Bates

指定状況　－

【形　態】 体長 4.5mm 程度、体型は細長く、頭部は複眼が良く発達し、前胸は幅広で、後翅が発達し良く飛翔する。体色は黒色で、緑銅色の光沢を有する。上翅はやや色が明るい。脚は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 河川の河口付近の汽水域に発達したヨシ原等に生息し、産地では個体数も多い。

【県内での生息状況】 以前より荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）や戸田市、古利根川流域の八潮市で記録され（吉越ほか，1998）、最近でも荒川流域のさいたま市の笹目川で記録されている（井上，2016c）。埼玉県はもともと海が無いこともあり、生息地が限られる上、下流域はコンクリート護岸が進んでおり、本種の生息環境は減少しつつある。

【特記事項】 琉球列島には別亜種が分布する。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **チビアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Chlaenius* (*Eochlaenius*) *suvorovi* (Semenov)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) EN
指定状況 －

【形　態】 体長 8.7 ～ 9.2mm、体型は細長く、頭部は複眼が良く発達し、前胸は細長く、上翅は長円形で前胸と上翅の表面は皺状。色彩は全身金緑色の金属光沢で覆われ、口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての河川敷、池沼周辺等に広がる低湿地に生息し、局所的な分布を示し、越冬はヨシ原の根際や朽木中で行われる。

【県内での生息状況】 古くは荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）の秋ヶ瀬、旧吹上町（現鴻巣市）や久喜市で記録があり（吉越ほか，1998）、近年では荒川流域の鴻巣市（新井ほか，2016 など）、川島町（井上，2016b）、江戸川流域の旧庄和町（現春日部市、亀澤，2010a）、吉川市（井上，2016b）等で生息が確認されている。しかし湿地の乾燥化等により近年生息情報が途絶えている産地もあり、安定した生息地は少ない状況である。

【特記事項】 関東各都県では渡良瀬遊水地が有名な産地であり、個体数も比較的安定しているため、その下流域にあたる江戸川流域でも大水等により分布拡散が生じると思われるが、荒川流域は下流域に多くの個体を流出するような産地が無く、秋ヶ瀬等では絶滅の危機にあると思われる。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **スナハラゴミムシ**
〔学　名〕 *Diplocheila* (*Diplocheila*) *elongata* (Bates)

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) VU
指定状況 －

【形　態】 体長 23.0 ～ 23.6mm、体型は細長く、厚味があり、頭部は大顎が発達し、前胸は側縁が弧状。上翅は長い。体色は全体が黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地帯において、河川敷や池沼周辺の湿地に生息し、夜行性で、水辺のやや草が生えた場所の地表面を走り回る。越冬は粘土質の崖の地中深くで行われる。

【県内での生息状況】 亀澤（2010a）により、江戸川流域の旧庄和町（現春日部市）より記録されたものが唯一である。

【特記事項】 関東各都県では千葉県などにわずかに記録がある。環境省レッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　ガムシ科
〔和　名〕 **ガムシ**
〔学　名〕 *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

埼玉県(2018) CR　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 33 ～ 40mm の大型種。体型は紡錘型で翅は少し尖る。上翅には小点刻からなる点刻列を持つ。前胸腹板突起は腹部第 2 節の上部に達する。脚は発達し、中・後脚脛節先端に鋭い棘を持つ。全身が黒色で金属光沢を持つ。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、湖沼、ため池、用水路、水田、休耕田、湿地、河川敷の溜まりなどに生息し、水生植物の豊富な場所から得られる。小規模な水域では餌が充分に確保できないことから、生息にはある程度の面積を有する止水域が必要となる。

【県内での生息状況】 県内では低地帯から低山帯にかけて記録が見られるが（吉越ほか，1998；埼玉県，2008）、近年の確実な記録はなく絶滅か絶滅寸前の状態と考えられる。低山帯から台地・丘陵帯において不確かな目撃情報があるものの発見には至っておらず詳細は不明である。

【特記事項】 本種は大型ゲンゴロウ類と同じくペット用として広く流通していることから、近年の記録がない地域において採集された場合には飼育個体の逸出や人為的な移入を疑うべきである。

科　名　ダルマガムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　DD

〔和　名〕 **ニッポンセスジダルマガムシ**

〔学　名〕 *Ochthebius nipponicus* Jäch

指定状況　－

【形　態】 微小な種で、体型は細長く、扁平で、頭部は複眼が張り出し、前胸は前縁が強く突出、中央付近が最大幅で、基部は強く狭まる。色彩は黒色で、触角と脚部は赤褐色。

【国内分布】 本州、南西諸島

【主な生息環境】 海岸等の岸壁に流れ落ちる淡水中に生息し、藻類が多い場所で見られる。なお、埼玉県以外の産地は全て海沿いである。

【県内での生息状況】 2009 年に秩父の荒川沿いの岸壁から得られた複数個体が記録されている（新井，2011d）。生息範囲は 10m ほどの範囲で極めて限られており、この環境も 2011 年 3 月の地震により土砂で一部が埋まり、生息地は決して良い状況とは言えない。環境省レッドランクでは情報不足とされ、埼玉県は内陸部における国内唯一の産地であり極めて貴重なことから、今回新たに掲載種に加えたものである。

【特記事項】 伊豆半島の海岸沿いから得られた標本を基に記載された種で、近年までほとんど得られていなかったことから知見に乏しい。今後、生態に関する調査成果を期待したい。

科　名　クワガタムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **オオクワガタ**

〔学　名〕 *Dorcus hopei binodulus* Waterhouse

指定状況　－

【形　態】 体長 27 ～ 53mm、大顎 4 ～ 20mm、体型は細長く厚味があり、オスの頭部は大顎が発達し、内側に 1 本の歯がある。前胸は側縁に 1 ヶ所歯がある。上翅は条線があまりはっきりせず、特に大型の個体ではその傾向が強い。体色は黒色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から台地・丘陵帯にかけて、広葉樹が主体の森林環境に生息し、クヌギやブナ等の落葉広葉樹の大木に生じた洞内を棲みかとし、夜行性で灯火にも飛来する。幼虫はサクラやクヌギ等の広葉樹の朽木内より見出される。

【県内での生息状況】 長瀞町、皆野町、横瀬町、小鹿野町（吉越ほか，1998）の記録があるが、近年の確認例はない。

【特記事項】

科　名　コガネムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **ダイコクコガネ**

〔学　名〕 *Copris ochus* Motschulsky

指定状況　－

【形　態】 体長 18 ～ 28mm、体型は丸く厚味があり、頭部は前縁が半円状、オスは 1 本の角があり、前胸はオスでは背面に 1 対の大きな突起がある。メスは突起が無く平滑で、表面は点刻に覆われる。体色は黒色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 本来の生息環境は山地帯の森林と思われるが、牛などの家畜の糞に依存する個体は平野部にまで分布を広げ、牧場等でも見出される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）上中野（斎藤，1978）、皆野町の秩父高原牧場（皆野町誌編集委員会，1982）の記録があるが、近年の記録はない。

【特記事項】

科　名　ハムシ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

〔和　名〕**ガガブタネクイハムシ**

〔学　名〕*Donacia lenzi* Schönfeldt

指定状況　－

【形　態】体長 6.1 ～ 7.3mm。上翅は黒紫色の個体が多く、色彩変異はあまりない。触角第 2 節と第 3 節はほぼ同じ長さ。オスの後腿節は太く、多数の棘をもつ。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】山地から丘陵地、平地の水路、ため池、池沼に生息する。成虫は 5 ～ 11 月にみられ、ジュンサイ、ヒツジグサの浮葉を食べる。

【県内での生息状況】斎藤（1978a）による旧大宮市（現さいたま市）の深作沼、羽生市上村君からの記録が県内の確認例のすべて。水域およびその周辺の各種開発、水質汚染等により生息環境が狭められていると考えられる。

【特記事項】近県ランク　栃木：準絶滅危惧種。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　VU

〔和　名〕**トダセスジゲンゴロウ**

〔学　名〕*Copelatus nakamurai* Gueorguiev

指定状況　－

【形　態】体長 3.9 ～ 4.6mm、体型は細長く扁平。体色は暗赤褐色で、上翅には黄褐色と黒色からなる縦筋の紋がある。口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】本州、四国

【主な生息環境】低地帯の低湿地に生息し、湧水のある水溜りでスゲ類等の植生の根際や湧水の湧き出す穴などから見つかり、土中にも潜んでいることがある。夜間の街灯にも飛来する。

【県内での生息状況】戸田市の道満より *C. hasegawai* の学名で新種記載された（Sato, 1988）が、東京都内の標本を基に既に記載されており、同物異名として無効処理された。越谷市の元荒川（碓井, 1994）、旧浦和市（現さいたま市）上大久保（新井ほか, 2016 など）、旧庄和町（現春日部市）新宿新田の江戸川河川敷（亀澤, 2011f）の記録があるが、県内で生息が現在でも確認されている産地はほとんど無いのが現状である。

【特記事項】従来、本州のみから知られていたが、四国の徳島県からも生息が確認された（中島, 2005）。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　NT

〔和　名〕**マルチビゲンゴロウ**

〔学　名〕*Leiodytes frontalis* (Sharp)

指定状況　－

【形　態】体長 1.5 ～ 2.0㎜。体型は短卵型で強く膨隆する。前胸後縁部から上翅基部にかけて一対の明瞭な縦溝を有する。上翅は大点刻をやや密に装う。脚は比較的短い。体色は濃褐色で不鮮明な暗色紋を装い、強い光沢がある。脚部は黄褐色。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】止水性であり、台地・丘陵帯から低地帯を中心とした水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地などに生息し、特に水深の浅い岸際や植物が浮島状になった部分に比較的まとまった個体数が見られる。

【県内での生息状況】県内では低地帯の旧大宮市（現さいたま市）、川越市、川島町から古い記録があるが（吉越ほか, 1998）、いずれの産地も環境が改変され現在は生息が確認できない。台地・丘陵帯から低地帯の調査でも再発見されず、現在の生息状況について追加情報はない。

【特記事項】低地帯に残された良好な止水環境には残存している可能性がある。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕 **ケシゲンゴロウ**
〔学　名〕 *Hyphydrus japonicus* Sharp

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 3.8 ～ 5.0㎜。体型は短卵型で、体高は著しく膨隆する。脚は比較的長い。上翅の点刻は大～小の様々なものが見られる。体色は頭部と前胸で褐色、上翅は黄色から黄褐色を基調とし複雑な黒色紋を装う。腹面および脚は黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 止水性であり、低山帯から低地帯までの水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地などに生息する。特に浅瀬で多く、水田や休耕田などでは個体数も多い。

【県内での生息状況】 県内では低山帯から台地・丘陵帯にかけて古い記録が見られ、かつては比較的広範囲に分布していたものと考えられる（吉越ほか，1998）。近年では横瀬町内の池 1 ヶ所で生息が知られるのみであり、他の産地は今のところ発見されておらず、県内では危機的な生息状況に陥っているものと推測される（新井ほか，2016）。

【特記事項】 里山環境を代表するゲンゴロウの一つであったが、近年では全国的に減少傾向が著しい（環境省, 2015）。特に都市部やその隣接する地区ではほとんど見られなくなりつつある。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **カワラゴミムシ**
〔学　名〕 *Omophron aequale aequale* A. Morawitz

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 5.5 ～ 6.5mm、体は半球形で平たく、特徴的な外見で他の種と見間違えることはない。色彩は黄褐色で、頭部、前胸背板中央ならびに上翅に緑銅色の金属光沢紋を有する。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけての河川敷、溜池周辺、あるいは海岸沿いに発達した砂丘等に生息し、草本類の少ない環境を好む。主に夜間活動し、地表面を非常に素早く走り回る。

【県内での生息状況】 古くより秩父市の浦山から長瀞町、皆野町、寄居町、北本市、旧大宮市（現さいたま市）、旧浦和市（現さいたま市）、戸田市といった荒川流域、高麗川流域の旧日高町（現日高市）、利根川流域の旧北川辺町（現加須市）に記録があり（吉越ほか，1998）、近年も江戸川流域の旧庄和町（現春日部市、亀澤, 2010a）や荒川流域の長瀞町（埼玉昆虫談話会，2015）で確認されている。しかし上流域のダム建設の影響や植生の変化により本種の好む砂地環境が縮小したり、レジャー目的で多くの人や車両が砂地に入り込む等の影響により、好適な環境が減少しつつある。

【特記事項】 関東各都県では千葉県に産地が多く、山地の沢沿いや大きな池沼の水辺でも多くの個体が観察される。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **オサムシモドキ**
〔学　名〕 *Craspedonotus tibialis* Schaum

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 20 ～ 24mm、体は細長く、頭部、前胸は幅広で、前胸基部は強くすぼみ、このため体型はひょうたん型を呈する。上翅は荒い点刻列で覆われ、つやが鈍い。後翅は発達する。色彩は黒色で、触角第 1 節と各脚の脛節は黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山地から低地帯にかけての河川敷に発達した砂丘に生息し、水辺から離れた草本類のほとんどない環境を好む。主に夜間活動し、砂の表面に開いた穴から這い出して、地表面を徘徊する。人の気配がすると素早く穴に潜り、擬死の状態となり動かなくなる。

【県内での生息状況】 古くは江戸川流域の旧吉川町（現吉川市）や荒川流域の寄居町、旧浦和市（現さいたま市）、高麗川流域の旧日高町（現日高市）で記録があり（吉越ほか，1998）、日高市の河川敷では近年でも確認されている（日本オサムシ研究会，2016）。また、荒川流域では長瀞町で生息が新たに確認された（新井，投稿中）。上流域のダム建設の影響や植生の変化により本種の好む砂地環境が縮小したり、レジャー目的で多くの人や車両が砂地に入り込む等の影響により、生息環境が減少しつつある。

【特記事項】 関東各都県でも埼玉県と同様近年の記録はほとんどない。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **アオヘリアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Chlaenius* (*Amblygenius*) *praefectus* Bates

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) CR
指定状況 －

【形　態】 体長 16.5 ～ 17.0mm、体型は細長く、厚味があり、前胸は側縁が弧を描く。色彩は黒色で頭部、前胸は緑～赤銅色の強い金属光沢を帯び、上翅は側縁附近に緑色がかった金属光沢を有する。口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低地帯の河川敷や水田周辺等の低湿地に生息し、産地は極めて局所的である。

【県内での生息状況】 古くより荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）、戸田市、旧大井町（現ふじみ野市）で記録があり（吉越ほか，1998）、筑波の土生コレクションを整理した目録中にこの記録の基になったと思われる 1950 年代の標本が再録されている（吉武ほか，2011）。渡良瀬遊水地の下流域、特に江戸川流域では生息環境が残されている可能性もあり、詳細な調査を要する。

【特記事項】 近年、岡山県で再発見され（渡部ほか，2015）、生態的な知見が報告された。なお、埼玉県内記録のうち旧児玉町（現本庄市）の記録（長島，1994）は、現地調査により閉鎖的な山間部の池沼周辺であることが判明しており、恐らく誤同定と思われるため標本確認が必要。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **クビナガキベリアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Chlaenius* (*Chlaeniellus*) *prostenus* Bates

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 11.0 ～ 12.5mm、体型は細長く、頭部は複眼が良く発達し、前胸は幅広い、色彩は、全体が淡い金緑色～赤銅色で、光沢が鈍く、口器、触角、脚部、前胸背板側縁ならびに上翅側縁は赤褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地帯において、河川敷や池沼、水田周辺の低湿地に生息し、主に夜行性で、水辺を素早く走り回る。越冬環境は、水辺のやや乾燥した粘土質の崖を好む。

【県内での生息状況】 県内では梶村（1955）が戸田市から記録し、この記録の基になったものと思われる標本が筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中に再録されている（吉武ほか，2011）。また、本種はスナハラゴミムシと同様の生息環境で見つかることから、同種が発見された江戸川流域で生息の可能性がある。

【特記事項】 関東各都県では千葉県に産地が多く、現在でも複数の産地が残されている。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **オオサカアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Callistoides pericallus* (L.Redtenbacher)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 11.3 ～ 12.0mm、体型は細長く、前胸は側縁が弧状。色彩は、頭部が金緑色の金属光沢を帯び、前胸背板は橙黄色、上翅は灰黒色で側縁と翅端の外側附近が橙黄色。口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 低地帯において、河川敷や田んぼ周辺の低湿地に生息し、越冬は水田の畦の土中や湿地周辺の朽木、あるいは崖などで行われる。

【県内での生息状況】 古くより多くの記録があり、荒川流域の川島町、桶川市、北本市、旧浦和市（現さいたま市）、戸田市、江戸川流域の旧吉川町（現吉川市）、また低湿地の残る久喜市で記録されている（吉越ほか，1998）。しかし、近年の記録は無いのが現状である。既知産地の多くは環境が変わってしまっており、安定した産地は少ないものと思われる。

【特記事項】 関東各都県では、千葉県内に産地が多い。このため、埼玉県内でも江戸川流域では吉川市以外でも新たに記録される可能性が高い。環境省レッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **ハガクビナガゴミムシ**

〔学　名〕 *Odacantha* (*Odacantha*) *hagai* Nemoto

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　DD

指定状況　－

【形　態】 体長 5.0 ～ 5.5mm、体型は細長く、頭部は頸部が細く、前胸は側縁が丸い。体色は黄褐色で、頭部と前胸は全体が黒色。上翅は側縁ならびに会合部に黒色部があり、基部は色がやや薄い。

【国内分布】 北海道、本州（関東以北）

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際の環境で、水面附近の草本類上を生活の場としており、ウンカ類の幼虫を捕食しているものと思われる。湿地の中でも局所的な分布を示し、越冬は生息環境の落葉下で行われる。

【県内での生息状況】 豊田（1997）により東松山市の九十九川流域の低湿地より報告され、この産地はその後埋め立てにより消滅したが、この他に東松山市（埼玉県，2002）、嵐山町（新井，2005d）、羽生市（林ほか ,2015）、江戸川流域の旧庄和（現春日部市、亀澤，2010a など）、荒川流域の川越市とさいたま市の行政境（新井ほか，2016 など）、川口市（川口市，1995）、日高市（埼玉県，2008）から確認されている。多くの産地が消滅の危機にある中で羽生市の産地は個体数が多い。また、国指定天然記念物の生息エリアとして保護されており安定した生息地として貴重である。

【特記事項】 関東各都県では渡良瀬遊水地が本種の多産地として有名であり、南は箱根の仙石原から太平洋沿いの大河川の河口付近などを中心に北海道まで産地が点在する。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **ヒメホソクビゴミムシ**

〔学　名〕 *Brachinus incomptus* Bates

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 5.5 ～ 8.0mm、体型は細長く、前胸は側縁がやや張り出し基部はわずかに尖る。上翅は後方に向かってやや広がり、表面は短い毛で覆われる。色彩は、上翅が暗灰色、それ以外は黄褐色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低地帯の河川敷や池沼周辺の低湿地に生息し、局所的である。ライトトラップで得られている個体が多く、走光性が強いものと思われる。越冬は水際の崖などで行われる。

【県内での生息状況】 国立科学博物館のコレクションから旧浦和市（現さいたま市）の 1950 年代の多数の個体が記録され（埼玉県，2008）、筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中にも旧浦和市、戸田市、富士見町（現富士見市）産の 1950 ～ 1960 年代の多数の個体が記録されている（吉武ほか ,2011）。近年では江戸川流域の旧庄和町（現春日部市）から記録され（亀澤，2010a）、現在の生息が確認された唯一の産地となっているが、河川改修により湿地環境が悪化している状況である。

【特記事項】 関東各都県では千葉県や茨城県に産地が散見される。県内には上記のほか秩父市橋立の記録（福嶋・長島，1987）があるが、標本を確認した結果、コホソクビゴミムシの誤同定であった。

科　名　セスジガムシ科

〔和　名〕 **セスジガムシ**

〔学　名〕 *Helophorus auriculatus* Sharp

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　EN

指定状況　－

【形　態】 体長 5 ～ 6mm、体型は細長く、頭部、前胸は幅広く、前胸背板には 5 列の縦溝があり、上翅は肩が張り出して側縁は弧状で、第 2、4，6 間室はやや隆まり、淡色細毛を生ずる。体色は頭部が黒色、それ以外はやや暗い黄褐色。

【国内分布】 本州（東日本）

【主な生息環境】 低地帯の河川敷や池沼周辺等の低湿地に生息し、水深が浅く、草本類が生える湿地環境を好み、秋に新成虫が出現して成虫越冬し、春まで見られる。夕方以降活動が活発になる。

【県内での生息状況】 北本市、行田市、幸手市、旧北川辺町（現加須市）に記録がある（吉越ほか，1998）が、いずれの産地でも再発見されておらず、絶滅が危惧される。

【特記事項】 関東各都県では、栃木県内に数ヶ所記録があるが、いずれの産地でも個体数は少ないようである。県内の旧児玉町（現本庄市）間瀬の記録（長島，1994）、横瀬町の寺坂棚田の記録（大熊，2004）など秩父地方の記録は、本種の生息環境と大幅に異なり、全てゴマフガムシ等の誤同定と思われる。

科　名　ヒメドロムシ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　EN

〔和　名〕 **アカツヤドロムシ**

〔学　名〕 *Zaitzevia rufa* Nomura et Baba

指定状況　－

【形　態】 体長 2.7mm 内外。体型は細長い。触角は目立たない。複眼は小さく退化傾向。上翅には点刻列を有し、側縁部に金色の毛束帯を持ち、その先端部は丸まる。脚はよく発達する。背面および脚は全体に赤褐色となる。

【国内分布】 本州（東日本）

【主な生息環境】 流水性であり、河川上・中流域において、大きな石の下の伏流水の湧き出し口周辺から確認されており、地下水や伏流水との結びつきが強い種である。河川周辺が樹林に囲まれた場所で得られることが多いが、比較的開放的な場所でも得られた記録がある。

【県内での生息状況】 県内では低山帯の秩父市（押掘川）から 2 頭が得られており（岩田・岩田，2011），その他の産地は知られていない。発見が困難な種であることから県内における生息状況は不明な点が多く、その動向に注視が必要である。

【特記事項】 同一地点において複数個体が得られることが少なく、採集が難しい。東北・関東地方の複数の県から得られているため、潜在的な分布域は広いと考えられる。

科　名　ジョウカイボン科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **キイロジョウカイ**

〔学　名〕 *Themus niisatoi* M. Sato et Takahashi

指定状況　－

【形　態】 体長 16.0 ～ 20.5mm、体型は細長く、前胸はほぼ四角い。上翅は肩が張り出し、体表は粗く毛で覆われる。体色は赤褐色で、頭部はやや暗色。前胸は黄色で中央が黒色、脚は腿節が黒色、腹部は黄色で各節基部側が黒色。

【国内分布】 本州（関東地方と福島県の一部）

【主な生息環境】 台地・丘陵帯の谷津環境に生息し、局所的な分布であり、成虫は 5 月上旬から 6 月上旬にかけて発生し、流水附近の葉上に静止する個体や花に集まる個体が観察される。

【県内での生息状況】 県南西部の飯能市から狭山丘陵周辺に分布し、極めて局所的である。日高市栗坪で記録され（雛倉，2003a）、今回の調査で飯能市の天覧山、多峰主山、岩渕からも新たに記録された（新井ほか，2016）。いずれの産地も面積規模が小さく、周囲は開発の進む地域であることから、生息環境は不安定な状況である。

【特記事項】 西日本には近縁種のカタキンイロジョウカイ *T. ohkawai* が分布する。

科　名　アリモドキ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ワタラセミズギワアリモドキ**

〔学　名〕 *Anthicus watarasensis watarasensis* Sakai et Ohbayashi

指定状況　－

【形　態】 体長 2.8 ～ 3.8mm、体形は細長く、やや扁平。全体黒色で、脚の先端や口器は褐色がかる。上翅には 2 対の黄褐色の斑紋があり、後方の紋は消失する傾向にある。後翅は縮小している。

【国内分布】 北海道、本州（関東以北）

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際の環境から見つかるが、確認地はきわめて限定的。湿地の草本類上を生活の場としている。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷（亀澤，2011a）、羽生市の宝蔵寺沼（新井，2011b）からしか見つかっておらず確認された範囲はいずれも狭い。江戸川流域では、河川改修の影響等により湿地環境が悪化している。

【特記事項】 渡良瀬遊水地産をもとに新種記載された種で、関東地方では、本県以外に茨城県、群馬県、栃木県から記録されている。ロシア沿海州地方から別亜種が知られ、日本産が基亜種。近県ランク　栃木・茨城：準絶滅危惧種。

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **ヨツボシカミキリ**
〔学　名〕 *Stenygrium quadrinotatum* Bates

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) EN
指定状況 －

【形　態】 体長 8 ～ 14mm、体型は細長く、前胸は縦長の円筒状で、上翅は側縁が並行。脚は、腿節中央付近が太い。体色は暗赤色で、上翅に黄白色の 4 つの円紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、落葉広葉樹を主体とした雑木林などの森林環境に生息し、成虫は春から夏季に出現し、クリなどの花を訪れるほか、灯火にも良く飛来する。かつてはどこでも見られた種だが、近年記録が激減しているとの理由から、環境省のリストにも新たに追加された。

【県内での生息状況】 山地帯では旧大滝村（現秩父市）から低地帯では旧鳩ヶ谷市（現川口市）まで県内に広く記録があり（吉越ほか，1998 など）、かつてはどこにでも見られた種である。近年の記録がほとんどなく、今回新たに掲載種に加えたものである。

【特記事項】

科　名　ハムシ科
〔和　名〕 **ツヤネクイハムシ**
〔学　名〕 *Donacia nitidior* (Nakane)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 5.0 ～ 6.5mm、体型は細長く、触角が比較的短く、上翅端は丸い。脚部腿節内側に小さな歯がある。体色は銅色、もしくは青色の金属光沢を帯び、触角第 2 ～ 5 節基部、脚部腿節基部、脛節と跗節の一部は赤褐色。

【国内分布】 本州（宮城県以南）　本州固有種

【主な生息環境】 台地・丘陵帯の谷津環境に生息し、スゲ類に依存し、成虫は 4 月下旬から 9 月にかけて出現し、湿地のスゲ群落周囲で活動し、スゲの花に集まる。幼虫はスゲ類の根部分を食べて育つ。

【県内での生息状況】 所沢市の狭山湖（南，1987）と飯能市の多峰主山（雛倉，2000）のほか、嵐山町平沢、飯能市の天覧山、飯能市岩渕から記録されている（新井ほか，2016）。このうち嵐山町ではスゲ群落の縮小にともない確認できなくなっているが、飯能市の産地では現在、範囲は狭いながらも安定して発生している。

【特記事項】 近県ランク　東京本土部：留意種。

科　名　ハムシ科
〔和　名〕 **スゲハムシ**
〔学　名〕 *Plateumaris sericea sibirica* (Solsky)

埼玉県(2018) EN　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 6.5 ～ 8.8mm、体型は細長く、翅端部は丸みを帯びた裁断状。前脛節外側端部は尖り、後脚腿節内側には大きめの歯がある。体色は変化に富み、黒、紫、青、緑、黄、赤と個体により様々で、黒色の個体以外はすべて金属光沢を帯びる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から台地・丘陵帯にかけて、高層湿原や谷津環境に生息し、ガマ類やスゲ類に依存し、成虫は春先から夏季に出現し、湿地に生える様々な花に集まる。幼虫はガマ類やスゲ類の根を食べて育つ。

【県内での生息状況】 古くより亜高山帯の旧大滝村（現秩父市）の雁坂峠や雁峠、低山帯の旧大滝村（現秩父市）川又、秩父市浦山、皆野町日野沢、台地丘陵帯の狭山湖や所沢市三ヶ島（吉越ほか，1998）、嵐山町塩山（豊田，1998b）から記録され、近年では入間市宮寺（福澤・岩田，2015）、所沢市の大谷戸、掘之内、飯能市の天覧山、多峰主山、岩渕（新井ほか，2016）から記録されている。現存する産地の多くは、狭山丘陵周辺の谷津環境で、局所的であり、周辺地域は開発が進んでいるため生息環境は不安定である。

【特記事項】 キヌツヤミズクサハムシとも呼ばれる。

科　名　ハムシ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **フトネクイハムシ**

〔学　名〕 *Donacia clavareaui* Jacobson

指定状況　－

【形　態】 体長 7.8 ～ 9.2mm。前胸背板には疎らな横皺と粗い点刻が密にあり、疎らな毛が生えている。脚は腿節基部が赤褐色。

【国内分布】 本州（関東以北の東北地方）、九州（福岡県）　日本特産種

【主な生息環境】 丘陵地から平野部の溜め池など、止水域に生息し、フトイ、ウキヤガラを寄主植物とする。成虫は 5 ～ 6 月に寄主植物の葉上や花にみられ、花粉や葉を食べる（林，2012）。

【県内での生息状況】 田悟（2005）による三郷市からの記録が唯一。

【特記事項】 近県では、千葉県で要保護生物に指定されている。ヒラタネクイハムシ *D. splendens* に一見似るが、前胸背板の横皺が目立たず、毛があること、脚が全体に銅色ではないことで区別できる。なお近県から記録のあるヒラタネクイハムシは本県からは未記録。

科　名　ミズスマシ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オナガミズスマシ**

〔学　名〕 *Orectochilus regimbarti regimbarti* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 8.7 ～ 10.2㎜。体型は紡錘状で細長く厚味があり、上翅表面には明褐色の微細な毛が密生する。上翅端の会合部は突出する。体色は脚は暗褐色。背面は全体に黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 河川の上・中流域を中心とする清流に生息し、流れが比較的緩やかで岸際にヨシなどの抽水植物が生育する場所の植物の葉が水面に垂れ下がったような地点で見られる。

【県内での生息状況】 県内では低地帯の大宮台地から台地・丘陵帯、秩父地方の低山帯まで分布することが知られるものの（吉越ほか，1998）、最近の生息状況が不明な産地が多い。最近では秩父地方を中心にややまとまった記録が見られ（岩田・岩田，2010a）、寄居町でも灯火への飛来が確認されている（新井ほか，2016）。

【特記事項】 近縁種のコオナガミズスマシ *O. punctipennis* とは体長差により、ツマキレオナガミズスマシ *O. agilis* とは上翅側縁の色彩や上翅会合部の形態により区別される。

科　名　コガシラミズムシ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **マダラコガシラミズムシ**

〔学　名〕 *Haliplus sharpi* Wehncke

指定状況　－

【形　態】 体長 3.3 ～ 3.8mm、体型は丸いが、他の近似種に比較して細長く、厚味がある。脚部は細長い。体色は黄褐色で、上翅には明瞭な黒色紋を有する。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から平地帯にかけて、水を張った水田や河川の堰の上流、池沼などに生息し、水生植物が生える環境を好み、成虫は初夏に多く、水中を泳ぐ様子が観察されるほか、夜間の街灯にも集まる。

【県内での生息状況】 川口市の荒川河川敷（田島，2008）、北本市石戸宿（荒木，1995）、嵐山町の志賀（新井，2005d）と鎌形（新井，2011a）、小川町下里（高橋，2000）で記録があり、特に嵐山町では多くの個体が観察されている。近年の確認事例が多いことから、今後の発生状況を注視する必要がある。

【特記事項】

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **クロズマメゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Agabus conspicuus* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 9.5 ～ 11.5㎜。体型は楕円形で厚みがある。体色は全体に黒色であり、上翅肩部や先端がやや淡色となる。触角は黄褐色。前・中脚は黄褐色で、後脚は暗褐色から黒褐色。腹面は黒褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、湖沼、ため池、湿地、休耕田、川岸の伏流水で形成された水溜りなどに生息し、岸際など水深が浅い場所の落ち葉や水生植物が豊富な地点に見られる。

【県内での生息状況】 県内では低地帯のさいたま市（旧浦和市）と鴻巣市、低山帯の秩父市と横瀬町から記録されている（吉越ほか，1998；岩田・岩田，2010b）。低地帯では近年の記録はなく詳細は不明であり、低山帯でも現在の確実な産地は横瀬町の１ヶ所のみであり、非常に危機的な状況にある（新井ほか，2016）。

【特記事項】 県内ではもともと記録が多くなく分布も限定されている傾向が強いが、近隣他県では産地も個体数も比較的多い種といわれる。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **マルケシゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Hydrovatus subtilis* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 2.4 ～ 2.7mm、体型は丸く厚味があり、体表面は全体が点刻され、光沢は鈍い。上翅は端部がわずかに尖る。体色は全体が黄赤褐色。オス交尾器中片は先端が嘴状に曲がり、先端は細まる。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低地帯の池沼や湿地の水溜り等、植物の生える浅い水域に見られ、産地は極めて局所的である。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷での確認例（亀澤, 2011e）が唯一の記録である。確認地は河川改修の影響等により湿地環境が悪化している。

【特記事項】 環境省レッドリストに追加となったため県下での状況を調査した結果、新たに掲載種に加えたものである。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **ルイスツブゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Laccophilus lewisius* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 3.9 ～ 4.7㎜。体型は逆卵型で扁平。背面は微細な網状印刻を密に装いやや強い光沢がある。上翅は淡黄褐色を基調とし、6 ～ 7 条の暗褐色から黒色の縦条が並列し不規則に断続、合着する。腹面は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、低山帯から低地帯までの水生植物（特に浮葉植物）の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地などに生息する。特に浅瀬や岸際で多い。

【県内での生息状況】 県内では大宮台地の上尾市西野の古い記録が唯一ものであり（吉越ほか，1998）、追加記録や新産地が見つかっていない。県内の生息状況については不明な点が多いが、全国的にも特に平野部での減少傾向が著しい種であることから、県内に残存していても状況は厳しいと推測される。

【特記事項】 国内においては本種に近縁で一回りほど小型のニセルイスツブゲンゴロウ *L. lewisioides* が記録されている。両種は同所的に生息することが多いといわれているため、同定には注意が必要である（森・北山，2002）。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕 **ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ**
〔学　名〕 *Hydaticus pacificus conspersus* Regimbart

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) EN
指定状況 －

【形　態】 体長 16 ～ 18mm、体型は長円形で、厚味がある。体色は黄褐色で、頭部の複眼基部附近、前胸の中央前縁と中央基部に黒色紋があり、上翅は基部に横帯状の黒色紋と、全体を覆うかすれた黒色部があり、側縁は部分的に黄色紋状に近い部分がある。

【国内分布】 本州（東北から関東、関西の一部）

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、河川敷や谷津田等の湧水が湧き出した湿地、細流に生息し、灯火にも飛来する。

【県内での生息状況】 寄居町末野、熊谷市楊井、嵐山町の嵐山渓谷、鳩山町、伊奈町小室、鴻巣市原馬室、北本市石戸宿等で記録があるが（吉越ほか，1998 など）、近年生息が確認されている産地はほとんどないのが現状である。

【特記事項】 オオイチモンジシマゲンゴロウとも呼ばれる。南西諸島には別亜種のリュウキュウオオイチモンジシマゲンゴロウ *H. pacificus sakishimanus* が分布する。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **コハンミョウモドキ**
〔学　名〕 *Elaphrus punctatus* Motschulsky

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) EN
指定状況 －

【形　態】 体長 6.0 ～ 6.5mm、体は細長く厚味があり、複眼が大きく発達する。触角は短く、上翅には特有の印刻を有する。体色は黒鉄色で光沢が強い。

【国内分布】 北海道、本州（中部以北）

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、湿地環境とその周辺の田畑に生息する。春先の暖かい日中に活動する様子が観察され、スゲ類の生える湿地や田んぼのあぜ、あるいは田植え前の耕やされた田んぼ等の地表面を素早く走り回る。

【県内での生息状況】 古くは川口市で記録され、春先の冠水前の水田などでよく見られたというが（吉越ほか，1998）、圃場整備の進んだ田んぼでは生息せず、近年確認されている嵐山町の谷津田（新井ほか，2016）、旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷湿地（亀澤，2010a）でもその後の環境変化で生息が確認できないなど、危機的な状況である。

【特記事項】 関東各都県では渡良瀬遊水地が好適な生息地として知られていたが、近年は湿地環境の乾燥化、あるいは環境復元として行われている大型重機を用いた造成が本種にとっての好適な生息環境を変化させてしまい、ほとんど見られない状況である。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **チョウセンゴモクムシ**
〔学　名〕 *Harpalus* (*Harpalus*) *crates* Bates

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) VU
指定状況 －

【形　態】 体長 12 ～ 16mm、体型は細長く、厚味があり、複眼は良く発達する。前胸は幅広く、上翅は肩が張り出し後翅も発達して飛翔する。体色は全体が黒色で、銅色の鈍い光沢があり、メスはオスに比べて光沢がより鈍い。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、河川敷等の適度に湿り気のある草地に生息し、マメ科のメドハギの種子を主に食べていることが明らかとなっている（森，2012）

【県内での生息状況】 旧江南町（現熊谷市）押切の荒川河川敷（小田，1995）や和光市（吉越，1997）、嵐山町（豊田，1998b など）、鳩山町、東松山市、小鹿野町（岩田・新井，2006a）に記録がある。いずれも草原環境で得られており、植生の遷移が進むと生息環境が変化し産地が消滅する恐れがある。

【特記事項】 森（2012）が指摘しているように、近年は造成地等の法面緑化にメドハギを利用する場合があり、こうした箇所が本来の生息地附近であれば、生息を一時的に拡大する可能性もある。しかし、本種が好む植生が疎な草原環境が保たれるには、植生の定期的な管理、あるいは大水等による環境撹乱が必須であることから、本種の根本的な生息地拡大につながるには課題が多い。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **オオトックリゴミムシ**

〔学　名〕 *Oodes vicarius* Bates

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　態】 体長 12.0 ～ 13.2mm、体型は細長く平たく、頭部は複眼は発達し、前胸は幅広で前縁に向かってすぼまり、上翅も幅広く、側縁は並行で、全体の形状がまるで徳利のようである。体色は全体が黒色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、池沼や河川周辺の低湿地に生息し、特に規模の大きな池沼に生息する場合は個体数も多く見られる。夜行性で、水際から水中に没した草本類などの表面を素早く走り回る。越冬は水際の崖や朽木中で行われる。

【県内での生息状況】 古くより多くの記録があり、荒川流域の寄居町、上尾市、旧浦和市（現さいたま市）、また良好な湿地環境である所沢市三ヶ島や、大きな池沼としては寄居町の円良田湖や旧大宮市（現さいたま市）、の深作沼で記録され（吉越ほか，1998）、川島町の入間川（豊田，2001b）でも確認されているが、円良田湖や深作沼では近年確認できない状況である。その他の産地でも同様の状況と考えられる。

【特記事項】 関東各都県では千葉県や茨城県に産地が多く、これらの産地では個体数も多い状況が見られる。環境省レッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **オオヨツボシゴミムシ**

〔学　名〕 *Dischissus mirandus* Bates

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 17 ～ 19mm、体型は細長く、小顎髭は非常に長い。前胸背板は側縁中央が張り出し六角で表面は皺状。上翅は長円形で肩が張り出す。体色は黒色で、上翅には前方側縁附近に 1 対、後方翅端附近に 1 対の計 4 個の淡黄色の紋がある。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、周囲に森林がある低湿地や湿度の高い谷間の地形に生息し、カタツムリ類を捕食しているものと思われる。越冬は崖の土中や朽木内で行われる。

【県内での生息状況】 県内での記録は少なく、古くは梶村（1955）による戸田市、旧浦和市（現さいたま市）の田島ヶ原の記録があり、その後、所沢市（福井，1966）や嵐山町（豊田，1999）で記録され、また筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中に梶村の記録の再録と思われる個体、浦和の他の産地の個体、旧北川辺町（現加須市）柳生のものが記録された（吉武ほか ,2011）。最近では旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷で比較的多いことが確認され（亀澤，2010a）、これは上流域の渡良瀬遊水地に関係するものと考えられる。

【特記事項】 栃木県と茨城県の渡良瀬遊水地にはかつて本種が多産したが、現在は湿地の乾燥化等の影響で同地でも個体数が減りつつある。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **クロモンヒラナガゴミムシ**

〔学　名〕 *Hexagonia insignis* (Bates)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 7.5 ～ 8.5mm、体型は細長く、平たい。頭部は大きく発達し、前胸は心臓形に近い六角形。色彩は、頭部、前胸は暗赤褐色。上翅は黄褐色で後方中央に黒色の紋がある。口器、触角、脚部は赤褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地帯の河川敷等の低湿地周辺、あるいは台地・丘陵帯から低山帯にかけての草原に生息し、後者の環境は関東地方ではほとんど無い。主に低湿地周辺のススキやオギ、ヨシなどの葉の隙間で生活し、葉の隙間に入り込んだ他の生物を捕食する。幼虫も同様の環境で見られる。越冬は生息環境の地表面で、石下や土中、落葉下において行われる。

【県内での生息状況】 県内では、古くは荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）、利根川流域の旧北川辺町（現加須市）で複数の記録があり（吉越ほか，1998）、その後、利根川流域の熊谷市、荒川流域の寄居町、熊谷市、江戸川流域の松伏町（いずれも新井ほか, 2016）、吉川市（宮内, 2010）、旧庄和町（現春日部市、亀澤 , 2010a）からも記録されている。いずれの産地も本種の好むオギの大株が育つ環境としては規模が小さく、現在でも生息するが個体数は少ない。また外来植物による植生への影響も見られる。

【特記事項】 関東各都県では、渡良瀬遊水地が本種の産地として有名であるが、近年では生息地周辺が大型重機による大規模工事で環境が著しく変化してしまい、生息状況は悪化しているものと思われる。

科　名　クワガタムシ科

〔和　名〕 **ネブトクワガタ**

〔学　名〕 *Aegus laevicollis subnitidus* Waterhouse

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 11 ～ 22mm、大顎 2 ～ 6mm、体型は細長くやや厚味があり、オスの頭部は大顎が大きく発達し、基部に 2 本の歯がある。前胸は側縁が並行。上翅は条線が深く、頭部、前胸に比較して艶が強い。体色は全体が黒色。

【国内分布】 本州（太平洋側は関東南東部以南、日本海側は山形県以南）、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 亜山地帯から台地・丘陵帯にかけての山林に生息し、広葉樹やモミなどの針葉樹の樹液に集まる。幼虫はアカマツ等の朽木内より見出される。このため、マツノザイセンチュウに起因するアカマツ林の衰退が本種の発生に影響しているものと思われる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の白岩山、寄居町、毛呂山町、鳩山町、滑川町の森林公園、飯能市の天覧山と朝日山（吉越ほか，1998）、また飯能市の顔振峠と小川町腰越の古い記録、滑川町と熊谷市の最近の記録（新井ほか，2016）がある。アカマツ林の衰退と共に、現存する生息地は減少する一方である。

【特記事項】

科　名　ヒメドロムシ科

〔和　名〕 **キベリナガアシドロムシ**

〔学　名〕 *Grouvellinus marginatus* (Kôno)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 2.0 ～ 2.2mm。体型はやや太短く、肩は明瞭。前胸背板はやや平坦で、表面は革皮状。脚はよく発達する。背面は全体に黒色で暗銅色の金属光沢を持ち、体側縁が鈍い黄色味を帯びる。脚も黒色となる。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 流水性であり、主に河川中・下流域の清流に生息する。河川の流れがある場所において、河床や流木上から得られる。

【県内での生息状況】 県内では、小鹿野町の薄川と毛呂山町大谷木（大谷木川）から僅かな個体が得られている（新井，2007a）。河川改修により生息環境が消失しやすい河川の中・下流域に生息するため、県内における生息域は狭められていると考えられる。

【特記事項】 近縁のツヤナガアシドロムシ *G. nitidus* は主に源流から上流域の岩盤上に生息し、基本的に両種が同所的に得られることはない。両種は外部形態が酷似しているため、同定には得られた環境を含めて検討する必要がある。

科　名　ホタル科

〔和　名〕 **ヒメボタル**

〔学　名〕 *Luciola* (*Hataria*) *parvula* (Kiesenwetter)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 6 ～ 9mm、体型は細長く、頭部は複眼が極めて発達し、メスは後翅が縮小して飛翔能力を欠く。腹端には発光器がある。体色は黒色で、前胸は淡い赤色で中央前縁から後縁附近にかけて黒色紋がある。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から低地帯にかけて、河川敷や畑地、草原等の湿った場所に生息し、成虫は春から夏にかけて出現するが地域ごとの発生期間は比較的短期で、オスは深夜に群飛する。幼虫は陸上生活を送り、地上部でオカチョウジガイやウスカワマイマイ等の小型の陸棲巻貝類を捕食する。

【県内での生息状況】 坂戸市、飯能市、越生町、秩父市の橋立、浦山谷、旧大滝村（現秩父市）の三国山下、白岩小屋付近、白岩山、旧両神村（現小鹿野町）の両神山清滝（吉越ほか，1998）で記録が以前より確認され、近年でも坂戸市の越辺川河岸や秩父市の赤平川附近（新井ほか，2016）から確認されている。坂戸市の個体群は極めて局所的であり、個体数も少ない。秩父市の個体群は個体数も多く、生息範囲も広いが、周囲に住宅開発の動きがあり、注意が必要である。

【特記事項】

科　名　ホタル科　　埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕**ゲンジボタル**

〔学　名〕*Luciola* (*Luciola*) *cruciata cruciata* Motschulsky　指定状況　－

【形　態】体長 12 ～ 20mm、体型は細長く、頭部は複眼が極めて発達し、上翅は条線が明らか。腹端には発光器があり、強い光を放つ。体色は黒色で、前胸は淡い赤色で、中央付近に十字の黒色紋がある。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】山地帯から低地帯にかけて、河川や水田の用水路等の流水環境周辺に生息し、成虫は5月下旬から7月中旬にかけて出現するが地域ごとの発生期間は比較的短期で、夜間に水路周辺を発光しながら飛翔する。メスはほとんど動かず、水辺でじっとしている。幼虫は流水中に生息し、カワニナやタニシ等の水棲巻貝類を捕食する。

【県内での生息状況】県内各所に数えきれないほどの記録があり、昔は旧大宮市（現さいたま市）や川越市にも生息していたようである。台地・丘陵帯の飯能市や越生町、比企郡地域の記録が多く、山地帯の記録は少ない（吉越ほか, 1998 など）。いずれの産地も現存する箇所は多いが、個体数は減少しており、夜間の夜空が明るいことや水辺環境の大きな変化（周囲の開発等に伴う乾燥化、外来植物の急速な繁茂、コンクリート護岸等）が影響していると思われる。

【特記事項】環境学習や地域イベントとして、飼育個体の放流が県内各地で行われているが、中には県産以外の関西地方等の個体群も含まれており、現存する地域付近でのこうした行為は遺伝的撹乱を起こす可能性が高く、埼玉県産の個体群が持つ地域特性が失われるため極めて問題である。

科　名　ヒメトゲムシ科　　埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕**ケモンヒメトゲムシ**

〔学　名〕*Nosodendron* (*Nosodendron*) *asiaticum* Lewis　指定状況　－

【形　態】体長 4.4 ～ 5.8mm、体型は長円形で、頭部は触角端部が広がる。上翅は肩がわずかに張り出し、赤褐色の刺毛塊が全体に散布される。体色は黒色。

【国内分布】北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】山地帯でモミやニレ、コメツガ、ミズメなどの樹液に集まるが発生は局所的である。全国的に記録の少ない種である。

【県内での生息状況】秩父市小赤沢にある原生林内のモミ樹液より県内で初めて記録された（新井, 2011c）。発生場所は1ヶ所が確認されたのみで、周辺の同じような環境では確認されていない。生態が明らかとなる一方、関東地方での記録もほとんど無い。このため、今回新たに掲載種として加えたものである。

【特記事項】近年、日本産のヒメトゲムシ科については分類学的な整理も行われ、本種については吉富（2015）により生態的知見がまとめられた。

科　名　ジョウカイモドキ科　　埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕**イシハラジョウカイモドキ**

〔学　名〕*Haplomalachius ishiharai ishiharai* M. Sato et Wittmer　指定状況　－

【形　態】体型は細長く、頭部はオスの触角が鋸歯状、上翅は後方に向けてやや広がる。体色は黒色で銅金色の金側光沢を帯び、前胸と上翅の側縁は淡黄褐色。触角と脚部は黄褐色で、部分的に黒色。

【国内分布】本州（関東地方の低湿地）

【主な生息環境】台地・丘陵帯から低地帯にかけての河川敷等に残る低湿地とその周辺に生息し、局所的である。成虫は4月上旬から5月中旬に出現し、日中、草本の葉上を活発に動き回る。

【県内での生息状況】北本市石戸宿、戸田市市道満、旧大宮市（現さいたま市）等産の標本を基に記載された種で（Sato & Wittmer, 1989）、旧浦和市（現さいたま市）から *M. vitticollis* ? として記録されたものも本種である（Nakane, 1985）。その後、東松山市毛塚（新井, 1998）、旧北川辺町（現加須市）の渡良瀬遊水地とその周辺、幸手市の江戸川河川敷（豊田, 2001d）、嵐山町志賀（新井, 2005d）、旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷（亀澤, 2011c）と記録されたが、このうち東松山市と嵐山町の産地では環境が変わり絶滅した。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ベーツヒラタカミキリ**

〔学　名〕 *Eurypoda batesi* Gahan

指定状況　－

【形　態】 体長20～40mm、体型は細長く扁平で、頭部は複眼が発達し、オスでは大顎がより発達。前胸は幅広で、上翅は側縁がほぼ平行。色彩は全体が暗赤褐色。

【国内分布】 本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、常緑広葉樹（照葉樹）の古木が残る森林環境に生息し、シイなどの樹洞や枯死した部分に依存し、成虫は6月から8月にかけて発生する。夜行性で、樹木の表面を歩き回る。

【県内での生息状況】 旧大宮市（現さいたま市）の記録（守屋，1964）が唯一と思われ、その後確認されていないようである。

【特記事項】 関東各都県では、千葉県などに記録が多い。

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **アカムネハナカミキリ**

〔学　名〕 *Macropidonia ruficollis* Pic

指定状況　－

【形　態】 体長14～16mm、体型は細長く、頭部は触角がひじょうに長い。上翅は肩が張り出し、表面は黒色の微毛で覆われる。体下面は黄灰色の微毛で覆われる。体色は黒色で、前胸は濃赤色。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 亜高山帯に分布し、低木のクロツバラに依存するものと思われ、クロツバラが優占する森林環境で見出される（大林・新里，2007）。成虫は夏季に出現する。

【県内での生息状況】 県内の記録2例のうち，横瀬町宇根（福嶋・長島，1987）は，標本確認の結果クロハナカミキリ　*Leptura aetiops* の誤同定であった（新井ほか，2016）。よって、旧大滝村（現秩父市）三国峠（小畑，2001）の記録が県内で唯一のものである。亜高山帯に生息地の主体があるものと考えられることから、県内での産地は限定される。今回、環境省レッドリストに加えられたこともあり、新たに掲載種として加えたものである。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオホソコバネカミキリ**

〔学　名〕 *Necydalis solida* Bates

指定状況　－

【形　態】 体長18～25mm、体型は極めて細長く、筒状で、前胸は前縁が強くくびれる。上翅は極めて短く、後翅は腹部背面を覆う。体色は黒色で、腹部の基部は黄褐色、上翅は黄褐色～黒色と変異がある。触角と脚部は部分的に黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 主に山地帯に生息し、ブナやミズナラ、カンバ類の衰弱木や立ち枯れに依存し、成虫は夏季に発生し、発生木の周辺で見られる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の三国峠（森本，1979）と入川谷（斎藤，1978）、中津川林道（新井，投稿中）から記録があり、いずれも原生林環境から得られている。このため産地も限定される状況であり、今回新たに掲載種として加えたものである。

【特記事項】 外見は一見ヒメバチ類に酷似しており、擬態しているものと思われる。

科　名　ハムシ科
〔和　名〕 **オオルリハムシ**
〔学　名〕 *Chrysolina virgata* (Motschulsky)

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 11 ～ 15mm。背面は金緑色で、上翅の中央に幅広い赤銅色の縦条がある。体下面は赤銅色。触角、脚は金緑色。日本海側や東北地方の個体群は、青～紫藍色だが、本県には関東平野に産する赤みの強い色彩型を産する。

【国内分布】 本州、九州（移入？）

【主な生息環境】 低山地から平地の河川敷や湿地、草地に生息する。成虫、幼虫とも、シロネ、ヒメシロネ、クルマバナ、エゴマを食べる。成虫は 4 ～ 10 月にみられ、年 1 化。幼虫または蛹で地中で越冬する（滝沢，2007）。

【県内での生息状況】 旧浦和市（現さいたま市）の田島ヶ原、秩父市の武甲山、小川町赤木、寄居町西ノ入、皆野町日野沢、旧大滝村（現秩父市）の入川谷、白岩山の記録はいずれも 60 ～ 90 年代の記録で（吉越ほか，1998）、2000 年以降は旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷の記録とさいたま市桜区（岩井，2009）程度である。江戸川河川敷では現在も寄主植物の群落が認められるが、最近、確認されていない（亀澤 , 2015）。

【特記事項】 近県ランク　群馬・茨城：絶滅危惧Ⅱ類、栃木：準絶滅危惧、神奈川：希少種、千葉：重要保護生物。

科　名　ハムシ科
〔和　名〕 **タグチホソヒラタハムシ**
〔学　名〕 *Leptispa taguchii* Chûjô

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 4.2 ～ 4.5mm。体形はやや扁平で細長く、全体黒色。前胸背の点刻は強く密、前胸側縁は前方にやや広がり、後縁前方でやや狭まる。

【国内分布】 本州、九州　日本特産種

【主な生息環境】 低山地から平地の草地、河川敷に生息する。寄主植物はススキで比較的広範にみられるが、本種の生息地はきわめて限定的である。成虫は 5 ～ 9 月にみられる（滝沢，2014）。

【県内での生息状況】 橋本・梶村（1958）による旧大宮市（現さいたま市）大砂土からの記録が唯一。アレチウリやセイタカアワダチソウ、オオブタクサ等の繁殖力が旺盛な外来植物により草地環境が近年、著しく変化しており、本種の生息を圧迫していると考えられる。

【特記事項】 棘がないトゲハムシ亜科のハムシ。近県ランク　栃木：要注目種。

科　名　ゾウムシ科
〔和　名〕 **オナガカツオゾウムシ**
〔学　名〕 *Lixus moiwanus* Kôno

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 12 ～ 13mm、体型は細長く筒状で、頭部は口吻が長く伸長し、前胸は側縁がほぼ並行で、上翅は長く、翅端は鋭く尖る。体色は黒色で部分的に灰色を帯び、生時は淡黄色の粉に全体が覆われる。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、河川沿いや池沼周辺、谷津等の湿地環境に生息し、ドクゼリに依存し、成虫は初夏から秋にかけて活動し、ドクゼリのある湿地の葉上に見られる。

【県内での生息状況】 東松山市毛塚（吉武，1998）より県内で初めて記録されたが、この産地は消失し、その後、日高市栗坪（埼玉県，2008 など）で確認され、現在この 1 ヶ所のみで毎年生息が確認されている。極めて局所的であり、絶滅寸前の状況と言えるが、ドクゼリがある湿地は県内で他にも存在するものと思われ、今後の調査で新たな産地が見つかる可能性も高いとみている。

【特記事項】

科　名　ミズスマシ科
〔和　名〕**コオナガミズスマシ**
〔学　名〕*Orectochilus punctipennis* Sharp

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　VU
指定状況　－

【形　態】体長5.5～6.2㎜の小型種。体型は紡錘状で細長く厚味があり、脚は黄色あるいは明褐色。背面は全体に黒色であり、上翅表面には明褐色の微細な毛が密生する。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】河川の中・下流域を中心とする清流に生息し、流れが比較的緩やかで水際にヨシなどの抽水植物が生育する場所の植物の葉が水面に垂れ下がったような地点で見られる。

【県内での生息状況】県内では低地帯の北本市の荒川本流、台地・丘陵帯の嵐山町の都幾川と日高市の高麗川、低山帯の秩父市の荒川本流および支流、小鹿野町の赤平川などから知られるが（吉越ほか，1998；岩田・岩田，2010a；新井ほか，2016）、近年の生息状況が不明な産地や生息数が減少している産地が多い。

【特記事項】本種の好む環境は河川改修等により改変されやすいことから全国的に減少しており、15都府県のレッドリストに挙げられている（環境省，2015）。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕**ヒメシマチビゲンゴロウ**
〔学　名〕*Nebrioporus nipponicus* (Takizawa)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長4.4～4.9㎜。体型は卵型。オスの前脚の爪は短い。上翅の側縁先端付近に一対の歯状突起を備える。体色は背面が淡黄褐色を基調とし、前胸背板に紋状、上翅に条状の黒色紋をそれぞれ有する。腹面は黒色。

【国内分布】本州、四国

【主な生息環境】河川中流域を中心とした清流に生息し、浅瀬や河川に近い水溜まりなども流れがないか緩やかな場所で、水底に小石が砂が溜まったような地点で確認される。水草などの遮蔽物が全くない場所でも見られる。

【県内での生息状況】県内では台地・丘陵帯から低山帯にかけて確認されているが、本種が見られるのは局地的である（埼玉県，2008）。長瀞町の岩畳の産地は個体数が多く安定した産地として貴重である（豊田，2000b）。北本市で本種と思われる記録が見られるが、標本が未確認で追加記録もないため低地帯の分布状況は不明である。

【特記事項】近似種のチャイロシマチビゲンゴロウ *N. anchoralis* とは腹面の色彩およびオス前脚跗節の形状により区別される（森・北山，2002）。また、河川における生息域も異なる。

科　名　ゲンゴロウ科
〔和　名〕**チャイロシマチビゲンゴロウ**
〔学　名〕*Nebrioporus anchoralis* (Sharp)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長4.7～5.5㎜。体型は卵型。オスの前脚の爪は全跗節とほぼ同長。上翅の側縁先端付近に一対の歯状突起を備える。体色は背面が黄褐色を基調とし、前胸背板に紋状の上翅に条状の黒色紋を有する。腹面は赤褐色。

【国内分布】北海道、本州（中部以北）

【主な生息環境】河川上流域を中心とした渓流に生息し、浅瀬や岸辺、溜まりなどの流れがないか緩やかな場所で、小石や砂が水底を覆うような地点において確認される。水草や落ち葉中だけではなく、遮蔽物のない場所にも見られる。

【県内での生息状況】県内では山地帯の秩父市（浦山、大滝）でのみ確認されており（埼玉県，2008；新井ほか，2016）、もともと本種の生息に適した環境は限られている。得られている個体数も少ないが、本種は生息地において多産することが多いことから、主に山地帯における生息環境の探索が課題。

【特記事項】近似種のヒメシマチビゲンゴロウ *N. nipponicus* とは腹面の色彩およびオス前脚跗節の形状により区別される（森・北山，2002）。また、河川における生息域も異なる。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ゴマダラチビゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Oreodytes natrix* (Sharp)

指定状況　－

【形　態】 体長 2.9 ～ 3.7㎜。体型は逆卵型でやや平たい。後脚は特に細く長い。体色は黒色を基調とし、頭部、前胸背板、上翅に淡黄色紋を有する。触角は黄褐色、脚部は赤褐色から暗色。腹面は一様に黒色となる。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 河川中流域を中心とした清流に生息し、浅瀬や河川に近い水溜まりなどの流れがないか緩やかな場所で、水底に小石が砂が溜まったような地点で確認される。水草などの遮蔽物が全くない場所でも見られる。

【県内での生息状況】 県内では低地帯の大宮台地から山地帯までの比較的広い分布を示すが（吉越ほか，1998；岩田・岩田，2010b）、現在も生息が確認されている産地の多くは秩父地方に限られている。最近の調査で熊谷市の荒川中流域で発見されたが、確認された範囲は局地的であり、中・下流域においては生息地が狭められている（新井ほか，2016）。

【特記事項】 ヒメシマチビゲンゴロウ *N. nipponicus* と似た河川環境を好むため、同所的に両種が得られることもある。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **キベリクロヒメゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Ilybius apicalis* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 8 ～ 10mm、体型は楕円形でやや細長く、体色は黒褐色で、やや金銅光沢を帯び、頭部前縁と頭頂の 2 楕円紋は黄赤褐色。前胸側縁と上翅側縁は黄褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低地帯で、水深の深い大きな池沼に生息し、水辺にヨシなどの植生があり、水面をヒシ等の浮遊植物が覆う環境を好む。

【県内での生息状況】 低地帯に位置する上尾市西野と北本市高尾にある蓮沼から記録され（吉越ほか，1998 など）これ以外の地域ではいまのところ記録が無いようである。低地帯に残る湖沼では外来魚の侵入により近年本種の生息環境に適さなくなっており、既知産地でも同様であることから、危機的状況にあると思われる。

【特記事項】

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **シマゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Hydaticus bowringi* Clark

指定状況　－

【形　態】 体長 12.5 ～ 14.0mm、体型は卵形で厚味があり、体色は黒色で光沢が強く、頭部前縁、前胸側縁から中央にかけてと上翅の縁、基部にそれぞれ淡黄褐色の紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、池沼や水田等の止水域に生息し、小さな水溜りや学校のプール等にも飛来する。また灯火にも飛来する。

【県内での生息状況】 秩父市、寄居町の玉淀湖、桜沢、小川町の腰越、飯田、嵐山町の菅谷、将軍沢、日高市、飯能市、狭山市、川越市の伊佐沼、羽生市の宝蔵寺沼、旧浦和市（現さいたま市）原山、旧大宮市（現さいたま市）の地蔵堀、深作、岩槻市等から記録があり（吉越ほか，1998 など）、かつては比較的普通に見られたが、現存する産地はわずかである。

【特記事項】

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **コウベツブゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Laccophilus kobensis* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 3.4 ～ 3.8㎜。体型は逆卵型で扁平。背面は微細な網状印刻を密に装い光沢がある。上翅は黄褐色を基調とし、輪郭の不明瞭かつ癒合した褐色の縦条を密に装う。上翅の基部付近に明色の横帯が見られる。腹面は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 止水性であり、低山帯から低地帯までの水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地などに生息する。特に浅瀬で多く、水田や休耕田などでは個体数も多い。

【県内での生息状況】 県内では長瀞町岩畳のライトトラップで得られたもの（新井，2006b）と秩父市寺尾の池で採集されたもの（新井ほか，2016）が知られる。前者は生息環境に関する情報が得られておらず現状は不明であり、後者は植生の遷移に伴って本種の生息環境が狭められていると考えられる。

【特記事項】 本種を含むコウベツブゲンゴロウ種群には複数種が含まれており、上翅の色彩やオス交尾器中央片先端部の形状によって区別される（Kamite *et al.*, 2005）。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **ホソハンミョウ**

〔学　名〕 *Cylindera gracilis* (Pallas)

指定状況　－

【形　態】 体長 10 ～ 12mm、体は細長く円筒形で、肩が狭く後翅が縮小し、飛翔能力を欠く。色彩は、黒色で上翅は乳白色の紋が 2 対あり、個体により会合部に赤色紋が発達する。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけての河川沿いの森林の林床、草地、田畑周辺に生息し、湿度の高い環境を好み、地上部を素早く走る。

【県内での生息状況】 古くから寄居町、旧大宮市（現さいたま市）、旧浦和市（現さいたま市）、所沢市、毛呂山町、鶴ヶ島市、小川町で生息が確認され（吉越ほか，1998）、近年でも熊谷市で確認されている（新井ほか，2016）。

【特記事項】 人為的撹乱の著しい環境では生息が絶えており、関東各都県でも良好な生息地が残る地域は少ない状況である。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **セアカオサムシ**

〔学　名〕 *Carabus tuberculosus* Dejean et Boisduval

指定状況　－

【形　態】 体長 16 ～ 22mm、体は細長く厚味があり、上翅は瘤状の特徴的な印刻があり、後翅は縮小して飛翔能力を欠く。体色は黒色で、頭部背面、前胸背板並びに上翅側縁に赤色～緑色の鮮やかな金属光沢を有する個体が多い。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて分布し、河川周辺等のススキやヨモギ等の生えるやや乾燥した草原を好む。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の川又、旧荒川村（現秩父市）の浦山や小鹿野町の志賀坂峠といった山地帯と、寄居町、川口市で以前より記録されているが（吉越ほか，1998）、最近の確認例はない。

【特記事項】 関東各都県では、渡良瀬遊水地などで最近でも生息が確認されている。このため渡良瀬川や江戸川流域の草原で発見される可能性もある。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **イグチケブカゴミムシ**

〔学　名〕 *Peronomerus auripilis* Bates

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　態】 体長 9.0 ～ 9.5mm、体型は細長く、厚味があり、頭部は複眼が発達し、小顎髭は長い。前胸は側縁中央付近が張り出し、後角もやや張り出す。全体が金色の長毛で覆われる。体色は黒色で、口器、触角、脚部は赤褐色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 クビナガヨツボシゴミムシと同様、台地・丘陵帯から低地帯にかけて、河川敷等の周辺の草原に生息し、朽木や石下に潜み、カタツムリ類を捕食しているものと思われる。越冬は生息環境にある朽木中、あるいは石下や土中で行われる。

【県内での生息状況】 県内での記録は少なく、古くは旧浦和市（現さいたま市）、久喜市、北本市より記録され（吉越ほか, 1998）、都幾川流域の嵐山町（豊田, 1998b）、旧庄和町（現春日部市）（亀澤, 2015）、荒川流域の寄居町、熊谷市（新井ほか, 2016）でもその後記録がある。河川敷のやや乾燥した草地環境が外来植物等の影響で急速に減少している。

【特記事項】 関東各都県でも記録は少ない。環境省レッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **アオバネホソクビゴミムシ**

〔学　名〕 *Brachinus aeneicostis* Bates

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 体長 7.0 ～ 10.5mm、体型は細長く、頭部は複眼が発達し、前胸は側縁がやや張り出し基部はわずかに尖る。上翅は後方に向かってやや広がる。色彩は、上翅が暗緑銅色、それ以外は赤褐色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低地帯の河川敷、田んぼ周辺等の低湿地に生息し、生息地は局所的である。ヨシ原などのある程度水が留まる場所に多く見られ、越冬は附近の崖の土中や朽木内で行われる。

【県内での生息状況】 古い記録として荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）の田島ヶ原の記録があり（梶村, 1955）、筑波の土生コレクションを取りまとめた目録中にこの記録の基になったと思われる個体を含め浦和産の 1950 ～ 1960 年代の多数の個体が記録されている（吉武ほか ,2011）。近年、江戸川流域の旧庄和町（現春日部市、亀澤, 2015 など）や松伏町（新井ほか, 2016）から再発見された。現在確認されているのは江戸川流域のみであるが、河川改修の影響による湿地環境の悪化が懸念される。

【特記事項】 関東各都県では、主に千葉県と栃木県、茨城県に産地が点在しており、いずれも低湿地の環境において確認されている。県内には上記のほか皆野町の記録（皆野町誌編集委員会, 1982）があるが、現地確認の結果、閉鎖的な山間部の沢沿いの環境であり、コホソクビゴミムシの誤同定と思われる。

科　名　ガムシ科

〔和　名〕 **スジヒラタガムシ**

〔学　名〕 *Helochares* (*Hydrobaticus*) *nipponicus* Hebauer

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　態】 体長 3.8 ～ 4.3㎜。体型は楕円形で平たい。触角は短く、上翅には 10 列の点刻列があり、一部が溝状となる。体色は赤褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、低山帯で植生の豊かな湿地、水田、休耕田などに生息する。

【県内での生息状況】 県内では横瀬町の寺坂棚田（新井, 2006a）で記録されたものが唯一であり、周辺地域での調査でも見つかっていない。現地は近年、棚田の観光地化と水路等の急速な整備により、生息環境が著しく失われている。他にも秩父地方の水田や湖沼に生息地があると思われることから、今後の調査に期待される。

【特記事項】 記録の少ない種であり、環境省のレッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　ガムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**クナシリシジミガムシ**

〔学　名〕*Laccobius kunashiricus* Shatrovskiy

指定状況　－

【形　態】体長 2.6 ～ 3.1㎜。体型は円形で盛り上がる。上翅に点刻列を有する。体色は頭部および前胸背板が黒褐色、前胸背板の側縁が黄褐色となる。上翅は黄褐色を基調とし、点刻列周辺は黒褐色となる。オス交尾器側片先端部に棘を持ち、中央片は先端付近で大きくくびれる。

【国内分布】北海道、本州（関東以北）

【主な生息環境】止水性であり、低山帯から低地帯までの水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地、河川敷の溜まりなどに生息する。特に浅瀬や岸際の植物の多い地点から得られることが多い。

【県内での生息状況】県内では低山地の秩父市大野原と台地・丘陵帯の寄居町折原から記録されており（新井・岩田，2011）、その後も前者からは追加記録がある（新井ほか，2016）。本種が好むような水生植物の豊富な湿地環境は県内で減少しており、生息域は狭められていると考えられる。

【特記事項】本種を含むシジミガムシ属の多くの種は外部形態が非常に似ており、オス交尾器の精査により種名を確定する必要がある。過去に県内からシジミガムシ *L. bedeli* として記録されているものの中には本種が含まれている可能性が高い。

科　名　ガムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**コマルシジミガムシ**

〔学　名〕*Laccobius masatakai* Kamite, Ogata et Hikida

指定状況　－

【形　態】体長 1.8 ～ 2.5㎜。体型は円形で盛り上がる。複眼は小さい。触角は短く、先端 3 節が球かん部を形成する。脚はやや長く、跗節が発達する。上翅に点刻列を有する。体色は全身黒色で、鞘翅端部が赤褐色となる。脚部は赤褐色。

【国内分布】本州

【主な生息環境】岩盤上を常に水が少量流れるかしたたるような場所に限って特異的に生息する。

【県内での生息状況】県内では低山帯の小鹿野町黒海土および秩父市久那から記録されている（新井・岩田，2011）。本種は 2007 年に記載されたばかりの種であり（Kamite *et al.*, 2007）、今後の調査によって新たな産地が発見される可能性が高い。生息環境が特殊であるため、生息に気付かずに開発される可能性もあり注意が必要である。

【特記事項】同一の岩盤上でも本種は特に流量の少ない場所に限って見られ、若干水量のある部分には河川に広く分布するコモンシジミガムシ *L. oscillans* が見られる（新井・岩田，2011）。

科　名　エンマムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**ヤマハマベエンマムシ**

〔学　名〕*Hypocaccus subaenus* (Schmidt)

指定状況　－

【形　態】体長 2.6 ～ 2.9mm、体型は丸く、前胸は基部中央以外に密な点刻を装い、上翅は前方半分の会合部附近は平滑でそれ以外はやはり密な点刻を装う。色彩は黒色で、緑銅色の強い金属光沢を帯びる。

【国内分布】本州

【主な生息環境】山地帯の河川沿いの砂地に生息し、日中の晴天時に地表面に近い場所を飛び回る。

【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の中津川で記録され（豊田，2001a）、浦山ダムのモニタリング調査でも確認されているが、近年の記録は無い。山間の河川沿いの砂地環境が少ないこと、近年のゲリラ豪雨等による環境撹乱等も生息に影響しているものと思われる。

【特記事項】

科　名　ダルマガムシ科
〔和　名〕 **セスジダルマガムシ**
〔学　名〕 *Ochthebius inermis* Sharp

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 1.9 ～ 2.1mm。体型は細長く、扁平。頭部は複眼が張り出し、前胸は側縁が丸まらず、基部に向かって狭まり、前胸背板中央の正中線の両脇に 2 個ずつ窪みがある。背面は全体が白色の毛で覆われる。色彩は鈍い青銅色の金属光沢を装う。脚は黄褐色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低山帯から台地・丘陵帯の清流脇の水深の浅い水溜りなどに生息する。流水性だが、流れのある場所で得られることはほとんどない。

【県内での生息状況】 小鹿野町の赤平川沿いの水溜りから得られた個体が初めて記録された（岩田・新井，2006b）。その後、秩父市の荒川流域でも確認され、秩父地方には他の地域にも生息する可能性が示唆された（新井ほか，2016）。極めて局所的に生息するが、産地における個体数が多い。生息環境が河川改修等の影響を受けやすいと考えられることから、今回新たに位置付けたものである。

【特記事項】 関東各都県で他にレッドランクに位置付けられている地域は無いが、全国的にはいくつか指定がある。

科　名　チビシデムシ科
〔和　名〕 **カントウコチビシデムシ**
〔学　名〕 *Sciodrepoides pulvialis* Nishikawa

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 2.8 ～ 3.3mm、体型は細長く涙型、頭部は前縁が丸く複眼は側方に位置し、前胸背板は幅広。全体が灰色の毛で覆われる。体色は黒色～暗褐色。

【国内分布】 本州（関東）

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての水田や河川敷周辺の草原や低湿地に生息し、カヤネズミやアカネズミの巣内から得られることが多い。冬季はススキなどの草本の根際の落葉中やネズミの巣内で越冬し、早春にネズミの坑道で、ネズミの糞の周辺で活動する姿が観察される。

【県内での生息状況】 北本市石戸宿が本種の基準産地であり（Nishikawa，1992）、その後、東松山市の九十九川流域の湿地（豊田，1998a）、嵐山町の都幾川河川敷（新井，2005d）、熊谷市の荒川河川敷（埼玉県, 2008）、旧庄和町（現春日部市）の水田利用された谷戸に接した樹林（亀澤，2013）からそれぞれ記録されたが、東松山市と旧庄和町の産地はその後開発行為により消滅している。

【特記事項】 関東の平野部に特有の種で、産地も限られており、県内の産地減少が種の存続に及ぼす影響は大きいと思われる。

科　名　シデムシ科
〔和　名〕 **ヤマトモンシデムシ**
〔学　名〕 *Nicrophorus japonicus* Harold

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT
指定状況　－

【形　態】 体長 14 ～ 25mm、体型は細長く、頭部は側頭部が発達し、前胸は背面中央前方と前方の横方向に浅い線刻があり、上翅は全体がほぼ同幅で、腹部は翅端から飛び出る。色彩は、不規則な形状の赤色紋が 4 つあり、頭部前方にも赤色部がある。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 主に低山帯から低地帯にかけて、河川敷等水辺の開けた草地が主な生息環境で、動物の死骸や糞などに集まる。

【県内での生息状況】 古い記録が多く、低地帯の川口市、新座市、戸田市、旧吉川町（現吉川市）、旧大井町（現ふじみ野市）、旧浦和市（現さいたま市）、旧大宮市（現さいたま市）、北本市、熊谷市、台地・丘陵帯の飯能市、狭山市、所沢市、低山帯の寄居町、皆野町、山地帯の旧大滝村（現秩父市）と記録されているが（吉越ほか，1998）、近年の記録はほとんどなく、旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷の記録（亀澤，2011b）程度である。河川敷の草原環境が変化していることに起因するものと考えられる。

【特記事項】 関東各都県では、千葉県や茨城県等に産地が多く、個体数も多いようである。

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **フジヤマダルマアリヅカムシ**

〔学　名〕 *Plagiophorus fujiyamai* (Kubota)

指定状況　－

【形　態】 体長 1.4 ～ 1.5mm、体型は細長く、頭部は丸く複眼は小さく、触角は末端節が巨大で横長の卵形。上翅は肩がなだらかで後翅が縮小し、飛翔能力を欠く。体色は全体が暗赤褐色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、神社やお寺の周囲に残る照葉樹林に主に生息し、朽木中や落葉下から見出される。

【県内での生息状況】 熱帯に分布の中心を持つ種群の最北端分布種で、県内では関東内陸部の北限に位置するスダジイを主体とした照葉樹の天然林が残されている小川町青山（野村・南部，1993）や嵐山町遠山（嵐山町，2003）から記録された。しかし、その後の追加記録は無く、移動能力に乏しいことから極めて局所的な分布が示唆される。

【特記事項】

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヤツメアリヅカムシ**

〔学　名〕 *Octomicrus enkaizanus* Nomura

指定状況　－

【形　態】 体長 1.5 ～ 1.8mm。細長いハネカクシ型のアリヅカムシ。全体黄褐色で光沢がある。後翅は発達する。オスの後腿節は太い。

【国内分布】 本州　日本特産種

【主な生息環境】 低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際の環境から見つかるが、確認地はきわめて限定的。湿地の落葉層を生活の場としている。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷からの記録があるのみ（Nomura，2010）。江戸川流域では、河川改修の影響等により湿地環境が変化している。

【特記事項】 埼玉県、神奈川県、東京都、京都府から各 1 例の記録があるのみ。県下から得られた標本は、増水時の漂着ゴミ下から採集された。四国からは本属の種（メスのため種未決定）が得られている。

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ペンギンダイコクアリヅカムシ**

〔学　名〕 *Rybaxis pinguis* Kurbatov

指定状況　－

【形　態】 体長 1.8mm 内外。全体赤褐色。上翅基部の孔点は 2 つずつで、オスの前脛節の内側に棘をもつ。同属の近似種とは、主にオス交尾器の側片先端に 2 歯があることにより区別される。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際周辺から見つかるが、確認地はきわめて限定的。湿地の落葉層を生活の場としている。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷からの記録があるのみ（Nomura, 2008；新井ほか , 2016）。江戸川流域では、河川改修の影響等により湿地環境が変化している。

【特記事項】 極東ロシアから記載された種。埼玉県の江戸川河川敷は本州から唯一知られる生息地。九州からも大分県からの 1 例の記録があるのみ（Nomura，2005）。

科　名　ハネカクシ科
〔和　名〕 **タカオアバタコバネハネカクシ**
〔学　名〕 *Nazeris ohkurai* T. Ito

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 4.7 ～ 5.3mm、体型は細長く、頭部は丸く、大顎が極めて発達する。上翅は肩がなだらか、体表は粗い点刻で覆われる。体色は暗褐色で、口器、触角、脚部は黄褐色。近縁種とはオス交尾器の形態による識別が必要である。

【国内分布】 本州（関東地方の秩父から奥多摩にかけての山沿いの低標高地）

【主な生息環境】 山地帯から台地・丘陵帯にかけての山林や河川沿いに生息し、その生息環境は主に照葉樹林であり、適度な湿り気のある落葉中でトビムシ類などを捕食する。飛翔能力を欠くため、地域個体群の交流がほとんど無い状況であり、宅地開発や樹木伐採等による周辺環境の変化で容易に産地が消滅する恐れがある。

【県内での生息状況】 旧児玉町（現本庄市）（*N.wollastoni* として記録、新井，2004b）、毛呂山町、日高市、飯能市、旧玉川町（現ときがわ町）、嵐山町、旧江南町（現熊谷市）（いずれも *N. hasegawai* として記録、新井，2004b）、東秩父村、小川町（新井ほか，2016）で記録されている。いずれも局所的な分布で、主に神社や古墳等に残存するスダジイやアラカシ等を中心とした照葉樹林の落葉下から得られている。

【特記事項】 県内からは当初アバタコバネハネカクシ *N. wollastoni* 等で記録されたが、その後標本精査の結果、県内産 *Nazeris* は 3 種が確認され、本種が最も分布域が限定される種であることが明らかとなった。

科　名　ハネカクシ科
〔和　名〕 **ヤチハネカクシ**
〔学　名〕 *Adinopsis nippon* Maruyama et Kamezawa

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長約 2mm。全体濃褐色で、全身細かい毛に覆われる。口器、脚、触角は黄褐色。触角は糸状。跗節式は 2-2-2 で、基部の 1 節が大きい。

【国内分布】 本州（関東平野）日本特産種

【主な生息環境】 低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際周辺から見つかるが、確認地はきわめて限定的。湿地の地表を生活の場としている。

【県内での生息状況】 春日部市の江戸川河川敷から得られた標本がパラタイプに指定されているのみ（Maruyama & Kamezawa, 2013）。江戸川流域では、河川改修の影響等により湿地環境が変化している。

【特記事項】 埼玉県以外は茨城県神栖町（タイプ地）からしか確認されていない。環境省レッドリストに新たに追加されたため、本県でも生息状況を調査し、今回新たに加えたものである。県下から得られた標本は、増水時の漂着ゴミ下から採集された。

科　名　ハネカクシ科
〔和　名〕 **ヌレチハネカクシ**
〔学　名〕 *Deinopsis modesta* Sharp

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長約 3mm。全体濃褐色で、全身細かい毛におおわれる。口器、脚、触角は黄褐色。触角は糸状。跗節式は 3-3-3。

【国内分布】 本州、九州　日本特産種

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際の環境から見つかるが、確認地は限定的。泥湿地の地表を生活の場とし、よく飛翔する。

【県内での生息状況】 嵐山町の将軍沢（新井 , 2004a）のほか、松伏町、旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷から得られている（新井ほか , 2016）。

【特記事項】 環境省のレッドリストに新たに追加されたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに加えたものである。

科　名　クワガタムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ミヤマツヤハダクワガタ**

〔学　名〕 *Ceruchus lignarius monticola* Nakane

指定状況　－

【形　態】 体長 11 ～ 14mm、体型は細長く円筒形で、オスは頭部、大顎が大きく発達し、前胸は幅広い。上翅は条線が明らかで、後方に向かってやや広まる。体表面は艶が強く、全体が黒色。

【国内分布】 本州（関東南西部から中部、近畿地方の山岳地帯）

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯にかけての森林に生息し、幼虫は湿度の高い林床において、褐色腐朽菌により赤く腐朽した朽木を餌とし、成虫も同様の環境より見出される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の白岩山（寺山, 1980）、中津川林道（柴田, 1996）、入川渓谷（安保, 2015）、飯能市の有間山（新井ほか, 2016 など）での記録がある。主に標高 1,000 m以上の原生林に分布している状況である。

【特記事項】

科　名　クワガタムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **マダラクワガタ**

〔学　名〕 *Aesalus asiaticus asiaticus* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 4 ～ 6mm、体型は太短く、厚味があり、頭部は小さい。上翅には黒色の毛塊が列状に生じ、体色は暗褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から低山帯にかけての広葉樹林に生息し、主に沢沿いの湿った環境で朽木中より見出される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の霧藻山（佐野, 1986）、旧荒川村（現秩父市）の熊倉山（小田, 1995）、秩父市の天目山林道、三峰山駆ヶ越トンネル（埼玉県, 2008 など）、中津川（新井ほか, 2016）で記録がある。

【特記事項】

科　名　コガネムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオキイロコガネ**

〔学　名〕 *Pollaplonyx flavidus* Waterhouse

指定状況　－

【形　態】 体長 16 ～ 20mm、体型は細長く、円筒形に近く、頭部は前縁が凹む。前胸は前縁に向かって狭まり、上翅は後方に向かって広がり、背面には不鮮明な点刻列がある。オスの腹部背面の尾節板は中央部が隆起する。脚が長く、色彩は全体が黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての森林とその周辺に局所的に生息する。河川敷や公園などで生息が確認されている。成虫は春先から梅雨入り頃に発生し、夜行性で夕暮れから林内を飛び回り、街灯にも集まる。

【県内での生息状況】 富士見市、旧大井町（現ふじみ野市）、所沢市、上尾市、熊谷市で記録され（吉越ほか, 1998）、狭山丘陵では最近も確認されており、インターネット上で生態写真が公開されている。

【特記事項】 関東近隣都県では、東京都で記録が多く、都内の公園で毎年発生していることは有名である。

科　名　コガネムシ科
〔和　名〕 **アカマダラハナムグリ**
〔学　名〕 *Anthracophora rusticola* Burmeister

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 15 ～ 22mm、体型は細長く幅広で厚味があり、前胸は前方に向かって狭まり、上翅は後方に向かって狭まる。色彩は赤色～赤褐色で黒斑に覆われる。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、森林に生息し、クヌギやコナラ等の樹液に集まる。幼虫はワシタカ類の巣に生息し、本種の生息環境はこれらの鳥類と密接な関係にあることが明らかとなっている。
【県内での生息状況】 旧大宮市（現さいたま市）、所沢市、狭山市、飯能市、嵐山町、寄居町、横瀬町、秩父市で記録があり（吉越ほか，1998）、この他にも生息しているものと思われるが、個体数が少なく確実な産地が無い状況である。
【特記事項】

科　名　コガネムシ科
〔和　名〕 **オオチャイロハナムグリ**
〔学　名〕 *Osmoderma opicum* Lewis

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 22 ～ 32mm、体型は長く幅広で、頭部は前頭が長く伸長し、前胸はオスでは中央に 2 本の縦隆条がある。上翅は肩が張り、側縁は緩い弧状で、幅広い。体色は紫銅色の光沢のある黒褐色。
【国内分布】 本州、四国、九州
【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯にかけて分布し、原生林等に生息し、樹木の幹にできた樹洞を棲みかとし、周囲を飛ぶ姿が観察されるほか、幼虫は洞の中で朽ちた樹木を食べて生育する。発生木の周囲には、オス成虫が発するじゃこうの香りが漂うため、生息確認の手掛かりとなる。
【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の雁坂峠、白岩山、雲取山、大輪、中津川（吉越ほか，1998）等で記録があり、近年では 2015 年に秩父市入川の記録がある（高杉，2016）。
【特記事項】

科　名　コガネムシ科
〔和　名〕 **トラハナムグリ**
〔学　名〕 *Trichius japonicus* Janson

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 12.7 ～ 16mm、体型は丸く、厚味があり、頭部は前頭が長く伸長する。前胸は丸く、長毛に覆われ、上翅は幅広い。尾節板は黄色の長毛で覆われる。色彩は黒色で、上翅は黄褐色で艶が無く、側縁に 3 対の黒色紋があるが、個体変異がある。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、森林の周辺や海岸などの草原に生息し、日中活動し花に集まる。
【県内での生息状況】 低地帯の鳩ヶ谷市（青木，1991）と台地・丘陵帯の日高市（斎藤，1991）で記録があるが、それ以外に知られていない。
【特記事項】 静岡県では海岸周辺で、長野県では河川周辺等で生息するが、関東地方では記録が極めて少ない。

科　名　コガネムシ科
〔和　名〕 **クロモンマグソコガネ**
〔学　名〕 *Aphodius* (*Aphodaulacus*) *variabilis* Waterhouse

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 4.9 ～ 7.3mm、体型は細長く、前胸はなだらかで、上翅は条線が明らかで表面は外縁と後方部が細毛に覆われる。色彩は黒色で、頭部前縁両側、前胸側縁は黄褐色、上翅は黄褐色と黒色の斑紋を生じ、個体差がある。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 台地・丘陵帯から平地帯の草原に生息し、各種動物の糞に集まる。秋から春にかけて成虫が活動し、特に冬季に多い。
【県内での生息状況】 古い記録で、羽生市、横瀬町の記録があり（吉越ほか，1998）近年の記録は一切ない。
【特記事項】 横瀬町の武甲山生川から記録があるが（福嶋・長島，1987）、この調査で得られた甲虫類の標本を調査した結果、本種は含まれておらず、誤りと見られる。

科　名　コガネムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕**ヒメキイロマグソコガネ**

〔学　名〕*Aphodius* (*Liothorax*) *inouei* Nomura

指定状況　－

【形　態】体長 3.0 ～ 4.3mm、体型は細長く、頭部は台形で基部がやや強く点刻され、前胸はなだらかで大小の点刻を散布し、上翅は条線が明らかで背面に毛は無い。色彩は黄褐色で、頭部の基部と前胸前縁は黒色。

【国内分布】北海道、本州、九州、南西諸島

【主な生息環境】台地・丘陵帯から低地帯の草原に生息し、夏季に発生し、各種動物の糞に集まる。

【県内での生息状況】県内では旧豊里村（現深谷市）中瀬と旧日高町（現日高市）高麗本郷の古い記録（斎藤，1978）があるのみで，近年の記録は見当たらない。

【特記事項】横瀬町の武甲山宇根の記録（福嶋・長島，1987）は、標本調査の結果，フチケマグソコガネ *A. postpilosus* の未熟個体であり，誤同定のため記録が削除された（新井ほか，2016）。

科　名　マルトゲムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**ダイセツマルトゲムシ**

〔学　名〕*Byrrhus fasciatus* (Forster)

指定状況　－

【形　態】体長 7.0 ～ 7.5mm、体型は丸く厚味があり、頭部は複眼が側方へやや張り出し、大顎は端部が鋭く尖る。前胸は前方へ狭まり、基部は中央が後方へ張り出す。上翅は丸い。体表面は毛で覆われ、金色の毛による斑模様がある。体色は黒色。

【国内分布】北海道、本州

【主な生息環境】亜高山帯から山地帯にかけて、森林の林床やその周辺に生息し、枯れ木に集まる。

【県内での生息状況】秩父の大滝和名倉山（釣巻，2014）の標高 2,020 m にある小規模な裸地より記録されている。分布の中心が亜高山帯にあるものと思われることから、県内の生息域は限られる。

【特記事項】

科　名　タマムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**エサキキンヘリタマムシ**

〔学　名〕*Lamprodila kamikochiana* (Obenberger)

指定状況　－

【形　態】体長 9 ～ 16mm、体型は紡錘状で細長く扁平。触角第 4 節は第 2 節よりも明らかに長く、体表面は密に点刻で覆われ皺状。体色は青味がかった緑金色の金属光沢を帯び、側縁は金色～わずかに赤味を帯びて、黒藍色の斑模様がある。

【国内分布】北海道、本州、四国

【主な生息環境】山地帯に生息し、ヤマハンノキやミヤマハンノキ、ヤナギ類に依存し、その衰弱木に集まる。

【県内での生息状況】秩父市の 1 例（埼玉県，2008）は、インターネット上に大滝村の中津川の 1997 年の記録が標本写真とともに掲載されているものであり、同地での採集状況が他の HP にも掲載されている。県内ではこの地域以外からの記録は無いものと思われる。

【特記事項】

科　名　コメツキムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕**コガネコメツキ**

〔学　名〕*Selatosomus* (*Selatosomus*) *puncticollis* Motschulsky

指定状況　－

【形　態】体長 13 ～ 16mm、体型は細長く扁平で、前胸は密な点刻で覆われ、後角は後方へ細く突出し、上翅は点刻列による条線が明瞭である。色彩は黒色で、上翅は金緑色の金属光沢を帯びる。

【国内分布】北海道、本州

【主な生息環境】北海道では低標高地にも生息し、幼虫は貯穀類の害虫として知られるが、本州では山岳地帯の高標高地にのみ分布し、局所的である。成虫、幼虫共に開けた環境の石の下などに生息し、日中石の上で静止する成虫を見ることがある。

【県内での生息状況】県内では亜高山帯にのみ分布するものと思われ、これまで秩父市の三国峠標高 1,849 m（新井，2006c）と雁坂峠に程近い黒岩尾根（新井，2011c）から記録がある。

【特記事項】近年、これまで本種とされてきたものが地域ごとに細分化され、別種として記載される傾向にあり、埼玉県産の個体群も詳細を検討する必要があると思われる。

科　名　ドロムシ科
〔和　名〕 **ムナビロツヤドロムシ**
〔学　名〕 *Elmomorphus brevicornis* Sharp

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 3.6 ～ 3.9㎜。体型は細長く丸みを帯びており、盛り上がる。触角は短く、複眼は発達する。脚は長く、発達した爪を備える。上翅は網目点刻を密に、微細毛を疎に装う。体色は暗褐色から黒色となる。

【国内分布】 本州、九州、南西諸島

【主な生息環境】 主に河川上・中流域に生息し、流れのある水底に沈んだ流木や川辺の水中に露出したヨシやツルヨシなどにしがみついており、生息条件がよい所では多産することがある。ため池や森林の落葉層中から得られた記録もある。

【県内での生息状況】 県内では台地・丘陵帯の入間市、東松山市、鳩山町から僅かな確認例があるのみであり、その後に追加記録や新記録はなく現状については不明な点が多い（新井，2007a）。開発により生息環境が消失しやすい台地・丘陵帯に分布の中心がある可能性が高い。

【特記事項】 本種の産卵は水中で行われ初齢幼虫も水中に生息するが、やがて上陸し土壌中で生活すると考えられる（林，2015）。

科　名　ヒラタドロムシ科
〔和　名〕 **マスダチビヒラタドロムシ**
〔学　名〕 *Malacopsephenoides japonicus* (Masuda)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 2.0 ～ 2.4㎜。体型は比較的幅広で、扁平。触角はオスでは非常に長く各節より分枝を生じる。一方、メスの触角は短い。上翅は長方形に近い。体色は明黄褐色から暗褐色で、口器、触角基部、脚部は黄褐色。頭部、前胸は明黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 幼虫は流水性で河川中・下流域に生息し、水底の礫などの表面に貼りついて生活している。成虫は陸上性で日中は河川付近の植物などに潜んでおり、夜間に活動し、灯火にも飛来する。成虫の出現期は５～８月である。

【県内での生息状況】 県内では台地・丘陵帯の嵐山町の鎌形（豊田，1998b ほか）、菅谷（豊田，2001c）、東秩父村の皆谷（岩田・岩田，2010b）、長瀞町の荒川流域（埼玉県，2008）、皆野町の三沢川、東松山市の都幾川、熊谷市楊井（新井ほか，2016）から記録されている。環境に大きな変化がない産地もあるが、今後の動向に留意する必要がある。

【特記事項】 関東以西では産地が多いとされる。県内では比較的近年になって産地が追加されるようになった。

科　名　ホタル科
〔和　名〕 **ヘイケボタル**
〔学　名〕 *Luciola* (*Luciola*) *lateralis* Motschulsky

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長７～ 10mm、体型は細長く、頭部は複眼が極めて発達し、上翅は条線が確認できる。腹端には発光器があり、発光によるコミュニケーションをとる。体色は黒色で、前胸は淡い赤色、中央付近に幅広い縦の黒条紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等に生息し、成虫は５月上旬から８月下旬頃まで出現する。発生期間も長い。夜間に水辺の周辺を発光しながら飛翔する。幼虫は流れの穏やかあるいは止水の水中に生息し、カワニナやタニシ類、ヒメモノアラガイなどを捕食する。

【県内での生息状況】 県内各所に数えきれないほどの記録があり、昔は旧浦和市や旧大宮市（現さいたま市）、草加市や蕨市、新座市等の平地帯でも確認されていた。現在は大宮台地でもわずかに生息地が残る程度で、主な生息地は比企郡や飯能市附近、秩父地方の低標高地である。

【特記事項】 環境学習や地域イベントとして、飼育個体の放流が県内各地で行われているが、中には県産以外の関西地方等の個体群も含まれており、現存する地域付近でのこうした行為は遺伝的撹乱を起こす可能性が高く、埼玉県産の個体群が持つ地域特性が失われるため極めて問題である。

科　名　マキムシモドキ科
〔和　名〕 **ハイマツマキムシモドキ**
〔学　名〕 *Laricobius kovalevi* Nikitsky

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 2.8mm、体型は細長く、頭部は複眼が側方へやや張り出し、複眼基部側に単眼がある。前胸は幅広く側縁は張り出し、表面は粗く点刻され、上翅は点刻列が明らか。体表面は長毛に覆われる。体色は赤褐色で、頭部と前胸は黒色。

【国内分布】 本州（東日本の高標高地）

【主な生息環境】 亜高山帯以上の高標高地に分布し、ハイマツにつくキタマツカサアブラムシを捕食する。

【県内での生息状況】 秩父市の十文字峠付近（新井，2012）が唯一の記録である。生息環境から秩父地方の稜線沿いにわずかに残るハイマツ帯に分布し極めて局所的と考えられる。このため今回新たに掲載種として加えたものである。

【特記事項】 近年、ロシアより記載された種で、日本では青森県の八甲田と静岡県の南アルプス光岳（初宿ほか , 2012）が他に知られている。

科　名　ヒゲボソケシキスイ科
〔和　名〕 **オオヒゲボソケシキスイ**
〔学　名〕 *Sibirhelus corpulentus* (Reitter)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 2.7 ～ 3.6mm。橙褐色から黒褐色まで変化する。オスの前脛節は湾曲する。

【国内分布】 本州（関東平野以北）

【主な生息環境】 平野部の低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際周辺から見つかるが、確認地はきわめて限定的。成虫は春季にカサスゲの花に集まる（Hisamatsu，2011）。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷からの記録（亀澤，2010b）が唯一の確認例。江戸川流域では、河川改修の影響等により湿地環境が変化している。

【特記事項】 ロシアのイルクーツクから記載された種で、国内では、本県以外には岩手県、福島県、栃木県から見つかっている。近県ランク　栃木：準絶滅危惧種。

科　名　ヒゲボソケシキスイ科
〔和　名〕 **和名未定**
〔学　名〕 *Platamartus jakowlewi* Reitter

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 2.5 ～ 3.5mm。体は黒色で、脚や口器、触角の基部は赤褐色。触角の先端 3 節は黒い。オスの触角は前胸背後角に達するほど長い。

【国内分布】 本州（関東平野）

【主な生息環境】 平野部の低湿地に生息し、スゲ類やヨシが生える水際周辺から見つかるが、確認地はきわめて限定的。成虫は春季にカサスゲの花に集まる（Hisamatsu，2011）。

【県内での生息状況】 旧庄和町（現春日部市）の江戸川河川敷から確認されている（亀澤，2010b；同，2014）。確認地は河川改修の影響等により湿地環境が変化している。

【特記事項】 東シベリアから記載された種で、国内では、本県以外には茨城県、群馬県、栃木県、東京都から見つかっている。前種オオヒゲボソケシキスイと同環境でみられることが多い。

科　名　オオキノコムシ科
〔和　名〕 **トウキョウムネビロオオキノコ**
〔学　名〕 *Microsternus tokioensis* Nakane

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 3.5 ～ 5mm、体型は細長く厚味のある長円形で、頭部は触角先端 3 節が幅広く、前胸は一面が点刻され、上翅は後方へ狭まる。体色は赤褐色で、上翅は黒色と黄色による紋があり、脚部は暗色。

【国内分布】 本州、伊豆諸島（三宅島、御蔵島）、九州、対馬、口永良部島

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、河川林や神社の境内に残る照葉樹林等に生息し、ネンドタケを食べることで知られるが局所的である。

【県内での生息状況】 旧浦和市（現さいたま市）の大門、神川町の金鑽神社（豊田，2001a）から記録がある。

【特記事項】

科　名　ツチハンミョウ科

〔和　名〕 **マルクビツチハンミョウ**

〔学　名〕 *Meloe corvinus* Marseul

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 7 ～ 27㎜。体は全体に軟弱。頭部および前胸は扁平で粗大点刻を不規則かつ密に装う。触角はオスメスともに数珠髭状。上翅は短く粗大な皺刻がある。腹部は露出する。脚は比較的長い。体色は主に黒青色だが、紺色に近いものも見られる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 主に林縁部、草原、畑地、裸地などの開けた日当たりのよい環境に生息し、雑草上や地表上を歩行（徘徊）する個体が見られる。幼虫はハナバチ類の巣内へ運ばれ、卵や幼虫や花粉団子を食べて成長することから、ハナバチ類が生息していることが本種の生息要因となる。

【県内での生息状況】 県内では低山帯の秩父地方や比企郡で確認されており（埼玉県, 2008）、小鹿野町（岩田, 2006a）、ときがわ町（新井ほか, 2016）の記録は比較的近年のものであり、環境の変化も見られないことから現在も生息しているもの可能性が高い。草原や森林の開発や植生の遷移に伴って生息環境が消失していると考えられる。

【特記事項】 幼虫期の栄養状態により成虫の体長に大きな差が生じる。近年、交尾前行動としてタッピング等を行うことが明らかとなった（岡野ほか , 2015）。

科　名　ハナノミ科

〔和　名〕 **クリイロヒゲハナノミ**

〔学　名〕 *Macrotomoxia castanea* Pic

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 8.0 ～ 16.5mm、体型は細長く厚味があり、頭部は大きく、頸部は極めて細く、複眼は発達し、触角は鋸歯状。前胸は幅広で、体表面は細毛で覆われる。体色は暗褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 関東以西に分布し、常緑広葉樹（照葉樹）のウラジロガシ類から成虫が脱出することが知られ、シイ・カシ類を主体とする森林に生息するものと思われる。夜行性で、灯火にも飛来する。

【県内での生息状況】 入間市の大妻女子大学構内から記録され（高桑, 2006）、その後、嵐山町菅谷で追加記録（鶴・新井, 2013）された。これが本種の分布上の北限記録となる。嵐山町はスダジイを主体とした残存照葉樹林の関東内陸部における北限地域であり、近世以前の植生が保存された環境と合わせて本種の存在は貴重なものであり、今回新たに掲載種に加えたものである。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科

〔和　名〕 **オニホソコバネカミキリ**

〔学　名〕 *Necydalis gigantea gigantea* Kano

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 16.5 ～ 34.0mm、体型は極めて細長く、筒状で、前胸は側縁に金色の微毛を密生する。上翅は極めて短く、黒色と赤黄色の微毛をビロウド状に密生し、後翅は腹部背面を覆う。体色は黒色で、触角と脚部は部分的に赤褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 主に山地帯に生息し、クワやケヤキ、トチノキ等の生木の枯死部に依存しており、幼虫はこの枯死部を食べて育つ。成虫は夏季に発生し、発生木の周囲で見つかることが多く、花に来ることもある。かつては桑園で発生を繰り返していたようであるが、現在ではこうした環境ではほとんど見られない。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の中津川渓谷で記録され（石蔵, 1996b）、その後、新たな報告は無いものと思われる。秩父地方では原生林に生息するのが主と思われ、このため産地も限定されている状況である。

【特記事項】 外見は一見ヒメバチ類に酷似しており、擬態しているものと思われる。屋久島には別亜種 *N. gigantea akiyamai* が分布する。

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕**アオカミキリ**
〔学　名〕*Schwarzerium quadricolle* (Bates)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 21 ～ 30mm、体型は細長く、頭部は触角が短く翅端に届かない。前胸側縁には顕著な突起があり、上翅は条線がある。体色は黒色で、頭部、前胸、上翅が深緑色から青緑色の金属光沢を帯びる。
【国内分布】北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】山地帯から低地帯にかけて、カエデ・モミジ類等に依存し、成虫は 6 ～ 8 月に出現し、花に飛来する。
【県内での生息状況】山地帯の旧大滝村（現秩父市）から低地帯の新座まで記録が散見されるが（吉越ほか, 1998）、いずれも古いものであり、近年の記録は少ない。
【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕**オオトラカミキリ**
〔学　名〕*Xylotrechus villioni* (Villard)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 21 ～ 27mm、体型は細長く円筒形で、頭部は触角が短く、前胸は幅広く厚味があり、上翅は側縁が並行。体色は黒褐色で、体全体に黄色と黒色の縞模様があり、肩部は赤色。スズメバチ類に擬態しているものと思われる。
【国内分布】北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】山地帯から低山帯にかけて、モミなどが生える森林に生息し、成虫は夏季に出現し、モミの周辺やシシウドの花上で見られる。幼虫は樹木の枝内を主に食べるため、独特の食痕が付き、これにより生息確認が可能である。
【県内での生息状況】入間市と旧大滝村（現秩父市）で確認されており（吉越ほか, 1998）、秩父市では近年でも確認されている。しかしながら発生地での個体数が少なく、しかも局所的なため、生息状況は依然として危機的状況と思われる。
【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕**キジマトラカミキリ**
〔学　名〕*Xylotrechus zebratus* Matsushita

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 10 ～ 15mm、体型は細長く筒状で、頭部は触角が短く、前胸は丸い。体色は黒色で、前胸の前縁ならびに後縁、小楯板は黄色の微毛を持ち、上翅には 4 本の黄色微毛の帯状紋が入る。
【国内分布】本州、九州（山岳地帯に分布）
【主な生息環境】亜高山帯のシラビソやコメツガを主体とする原生林に生息する。
【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の稜線沿いを中心に古い記録が多数ある（吉越ほか, 1998）。また、長瀞町の古い記録もあるが（埼玉県立蕨高等学校生物クラブ, 1964）、遇産と思われる。近年の記録はほとんど見当たらない。
【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕**フジコブヤハズカミキリ**
〔学　名〕*Mesechthistatus fujisanus* Hayashi

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】体長 12 ～ 19mm、体型は長く、頭部はオスの触角が長く、体長の 2 倍弱、上翅は肩部より翅端にかけて角張り、翅端は尖る。上翅基部には顕著な黒色瘤がある。体色は濃茶褐色で、上翅中央よりやや後方に明色の帯状紋がある。
【国内分布】本州（秩父山地から丹沢、八ヶ岳、富士山、筑摩山地と三国山脈の一部に分布）
【主な生息環境】亜高山帯から低山帯にかけて、ブナ等を主体とする森林とその周辺の草原・荒れ地に生息し、地面や草本上の枯葉などより見つかる。
【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の各地に古い記録が多く（吉越ほか, 1998）、近年でも中津川や雁坂峠付近のワサビ沢（新井ほか, 2016）等の記録がある。しかしながら、ニホンジカによる草本類の採食影響から、本種の好む生息環境が近年激減しており、本種の生息にも少なからず影響を与えているものと思われる。
【特記事項】

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　NT

〔和　名〕 **ヒメビロウドカミキリ**

〔学　名〕 *Astynoscelis degener* (Bates)

指定状況　－

【形　　態】 体長 8.5 ～ 12.0mm、体型は細長く、頭部はオスでは触角が長く体長の 2 倍ほど、体色は暗褐色で、全体に灰白色の微毛による斑紋を生じる。触角は各節の基部側が明色。

【国内分布】 本州（新潟・関東以西）、九州、

【主な生息環境】 亜高山帯から低地帯にかけて、河川敷等に生育するキク科のオトコヨモギやヨモギに依存し、6 ～ 8 月に主にオトコヨモギの茎にしがみついている成虫が見つかる。また、夜間は灯火にも飛来する。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の二瀬や入川谷、横瀬町の二子山に古い記録があり（吉越ほか，1998）、近年では熊谷市押切でも確認されている（新井ほか，2016）。発生時期には個体数も比較的多いが、局所的な発生が確認されている。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **チチブニセリンゴカミキリ**

〔学　名〕 *Niponostenostola niponensis niponensis* (Pic)

指定状況　－

【形　　態】 体長 10 ～ 13mm、体型は細長く、頭部は触角が体長とほぼ同長で、上翅は肩が張り、側縁はほぼ平行。体色は黒色で、体下面と脚は灰色微毛に覆われ、前胸は側縁が暗赤色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から低山地にかけて、ブナやシナノキ、サワグルミ等の生える森林に生息し、成虫はこれらの生葉を食べる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の各所と横瀬町から記録があり（吉越ほか，1998）、近年でも秩父市の中津川での記録がある（新井ほか，2016）が、県内の確認状況は少ない。

【特記事項】

科　名　チョッキリゾウムシ科

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオケブカチョッキリ**

〔学　名〕 *Involvulus amabilis* (Roelofs)

指定状況　－

【形　　態】 体長 4.5 ～ 5.4mm。全体青藍色で、暗褐色毛をよそおう。上翅第 9 点刻列は翅端近くまでのび、前胸側縁の丸みは強い。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 山地から平地にかけての河川敷、湿地周辺のやや乾いた草地に生息する。キンポウゲ科のカラマツソウ属を寄主植物とし、成虫は年 1 回、春季に出現する。

【県内での生息状況】 旧浦和市（現さいたま市）塚本（藤多，1985）、旧北川辺町（現加須市）の渡良瀬川河川敷（雛倉，2003b）の記録があるのみ。草地の各種開発や外来植物の繁茂等により、生息環境が狭められていると予想される。

【特記事項】 栃木県側の渡良瀬遊水地では、環境省レッドリスト（2015）で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているノカラマツから成虫が確認されており、本県でも寄主植物としている可能性がある。近県ランク　栃木：要注目種。

科　名　ゾウムシ科
〔和　名〕 **スゲノハラジロヒメゾウムシ**
〔学　名〕 *Limnobaris japonica* Yoshihara et Morimoto

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 3.0 ～ 4.1mm。全体黒色で光沢があり、上翅の第 3 ～ 6 間室の基部には細い白色の鱗毛列がある。体下面は黄色みをおびた灰色鱗片で広くおおわれる。オスでも前脛節の内側中央付近に棘はない。

【国内分布】 北海道、国後島、本州

【主な生息環境】 河川敷や池沼畔の湿地のスゲ群落に生息する。成虫は春季から夏季にみられ、アゼスゲなどのスゲ類の葉を表面を食べる。

【県内での生息状況】 雛倉（2003b）による旧北川辺町（現加須市）の渡良瀬川河川敷の記録のほか、さいたま市の公園、春日部市の江戸川河川敷から記録がある（新井ほか , 2016；吉原 , 2016）。春日部市の江戸川河川敷ではヤナギ類の疎林周辺のスゲ類にいまのところ多く生息しているが、河川改修の影響等で湿地環境が変化しているので生息状況への影響が懸念される。

【特記事項】 近県ランク　神奈川：絶滅危惧Ⅱ類。

科　名　ゾウムシ科
〔和　名〕 **ババスゲヒメゾウムシ**
〔学　名〕 *Limnobaris babai* Chûjô et Morimoto

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 3.8 ～ 4.2mm、体型は細長く、頭部は複眼が発達し、口吻が細く伸びる。オスの前脛節は中央付近が突出し、メスではこれがややゆるい。体下面には一部に灰色鱗片を生ずる。体色は黒色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低地帯の河川敷等に残る低湿地に生息し、スゲ類、アブラガヤに依存し（川瀬，2002 など）、生息地では個体数も多いが、局所的である。

【県内での生息状況】 旧浦和市（現さいたま市）大門と旧与野市（現さいたま市）大戸（藤多，1987）、旧大宮市（現さいたま市）島町（大宮市, 1994）から記録されているが、近年の記録はない。

【特記事項】 関東近隣都県では、栃木県に記録が多いが、近年生息状況が悪化しているとして県レッドリストに位置付けられている。神奈川県では箱根の仙石原以外での生息が確認できない状況で、県レッドリストに位置付けられている。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **ニッコウオオズナガゴミムシ**
〔学　名〕 *Pterostichus* (*Lianoe*) *macrogenys* Bates

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 20mm 程度、体型は細長く、平らで、頭部と大顎が大きく発達し、大顎は左側がより長い。複眼は縮小し、側頭部が張り出す。体表面は艶が強く、色彩は黒色で個体によりやや赤味を帯びる。

【国内分布】 本州（新潟南部から静岡東部にかけての山地帯）

【主な生息環境】 山地帯から低山帯にかけての沢沿いや森林の林床に生息し、地中が礫質で間隙が多い冷涼かつ湿潤な環境を好む。こうした環境下で、地中に生息するガロアムシ等の節足動物を捕食しているものと思われる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の地蔵峠や東秩父村の白石峠から記録され（豊田，1998a）、近年でも秩父市の雁坂峠付近のトーバク沢（Sasakawa，2005）や八丁峠（新井，2011c）で記録されている。原生林が残る沢沿いの源頭部附近に限って生息する傾向が強く、そうした環境は限られるため、細々と生き残っていると考えられるが、ニホンジカによる草本の採食影響、新たな林道建設、山林の一斉伐採等による乾燥化で産地が減少しつつある。

【特記事項】 近年、この種群はオス交尾器内袋の形状に基づき分類の細分化が進み、また未記録の地域から新たな近縁種も発見されている。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **ヒトツメアオゴミムシ**
〔学　名〕 *Callistoides deliciolus* (Bates)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) NT
指定状況 －

【形　態】 体長 10.0 ～ 11.5mm、体型は細長く、前胸は側縁が弧状。上翅は長円形。体色は頭部が金緑色の金属光沢を帯び、前胸背板は橙黄色、上翅は灰黒色で側縁と翅端附近の会合部が橙黄色で一つ目状。口器、触角、脚部は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、畑や山林（主に松林）周辺に生息。特に水路が近い桑畑などの環境を好む。主に夜行性で地表面を素早く走り回り、越冬は崖の土中で行われる。

【県内での生息状況】 古くは旧浦和市（現さいたま市）、寄居町、皆野町で記録され（吉越ほか，1998）、嵐山町（豊田，1998b 他）、美里町、鳩山町（新井ほか，2016）と現在でも記録がある。

【特記事項】

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **クビナガヨツボシゴミムシ**
〔学　名〕 *Trinoderus singularis* (Bates)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) DD
指定状況 －

【形　態】 体長 10.7 ～ 11.0mm、体型は細長く、頭部は細長く、前胸側縁は張り出して六角形。体表面は長い毛で覆われる。色彩は、全体が黒色で、上翅には 4 つの橙赤色の紋があり、口器、触角、脚部は赤褐色で部分的に黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、河川敷等の周辺の草原に生息し、朽木や石下に潜み、カタツムリ類を捕食しているものと思われる。越冬は生息環境にある朽木中、あるいは石下や土中で行われる。

【県内での生息状況】 古くは旧浦和市（現さいたま市）や旧大井町（現ふじみ野市）、旧吹上町（現鴻巣市）で記録され（吉越ほか，1998）、その後、嵐山町（豊田，1998b など）や東松山市の都幾川流域、入間川流域の川越市、荒川流域の旧川本町（現深谷市）、鴻巣市、利根川流域の深谷市、羽生市（いずれも新井ほか，2016）で記録されている。各所に広く分布するが、生息範囲はヨモギやススキが優先の乾燥した植生の環境に限定されており、アレチウリやセイタカアワダチソウ、オオブタクサ等の繁殖力が旺盛な外来植物により環境が著しく変化しており、今後さらに生息域が減少する可能性が高い。

【特記事項】 関東各都県では、東京都の多摩川流域や栃木県の渡良瀬遊水地等で記録があるが、全体としては少ない状況である。環境省レッドリストに新たに情報不足として位置付けられたため、埼玉県でも生息状況を調査し、今回新たに掲載種に加えたものである。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **キノコゴミムシ**
〔学　名〕 *Lioptera erotyloides Bates*

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長 13 ～ 15mm、体型は細長く、頭部は複眼が良く発達し、前胸は幅広で側縁は丸まり、上翅はやや幅広い。色彩は、全体が黒色で、上翅には肩部と翅端附近にオオキノコムシ様の橙赤色紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて生息し、雑木林等のクヌギやコナラの樹液に集まるほか、カワラタケ類等のキノコ類にも集まる。こうした環境に集まる他の昆虫を捕食しているものと思われる。

【県内での生息状況】 旧日高町（現日高市）、上尾市、旧大滝村（現秩父市）の記録や（吉越ほか ,1998）、秩父市、東秩父村（新井ほか，2016）での記録があるが、東秩父村の産地ではクワガタムシ類の採集に伴うキノコ類の生息状況の悪化で近年では生息を確認できない状況である。

【特記事項】 関東各都県では、山梨県が本種の産地として良く知られているが、全体としては産地は限られるようである。

科　名　オサムシ科
〔和　名〕 **アリスアトキリゴミムシ**
〔学　名〕 *Lachnoderma asperum* Bates

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　DD
指定状況　－

【形　態】 体長 7.5 ～ 8.0mm、体型は細長く、頭部は複眼が良く発達し、前胸は側縁部が大きく張り出す。体表面は全体が長毛で覆われる。色彩は、黒色で、上翅は赤褐色から暗褐色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 低山地から低地帯の河川敷等周辺の開けた草原に生息し、カワラケアリの巣内あるいは行列附近で見つかる。

【県内での生息状況】 荒川流域の旧浦和市（現さいたま市）田島で記録され（梶村，1955、斎藤，1978）、その後、都幾川流域の東松山市（豊田，2000f）、嵐山町（豊田，2000h）、庄和町（現春日部市）（亀澤，2010a）から報告されたが、東松山市の産地は環境が変化し、カワラケアリは生息しているものの、本種はその後確認できない状況である。

【特記事項】 関東各都県では渡良瀬遊水地が本種の多産地として知られるが、近年では大型重機による大規模な地表の撹乱で生息地周辺の環境が著しく変化し、生息状況は悪化しているものと思われる。

科　名　エンマムシ科
〔和　名〕 **ルリエンマムシ**
〔学　名〕 *Saprinus splendens* (Paykull)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 5.2 ～ 7.7mm、体型は丸く、前胸は側縁に密な点刻を装い、上翅は前方半分の会合部附近はわずかに平滑で、それ以外は密な点刻を装う。色彩は黒色で、青色の強い金側光沢を帯びる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 開けた環境を好み、牧場や河川敷などで見つかることが多い。県内では台地・丘陵帯から低地帯にかけての河川敷とその周辺より確認されている。動物の死骸に発生するハエ類の幼虫を捕食する。

【県内での生息状況】 越辺川流域の毛呂山町、荒川流域の北本市石戸宿、荒川支流の霧敷川沿いの旧与野市（現さいたま市）で記録され（吉越ほか，1998）、その後、利根川流域でも確認されている（埼玉県，2008）が記録が少なく、生息に適した広い草原が減少していることも影響していると考えられる。

【特記事項】

科　名　ダルマガムシ科
〔和　名〕 **ヨシトミダルマガムシ**
〔学　名〕 *Hydraena yoshitomii* Jäch et Díaz

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 1.4 ～ 1.6mm の小型種。体型は細長く、扁平。頭部は小顎髭が長く、体表面には密に点刻を装う。体色は暗褐色で、脚部は赤褐色。

【国内分布】 本州（関東西部）

【主な生息環境】 山地帯から台地・丘陵帯にかけての湧水の湧出口や滝の周辺など、水深がほとんどないような細流に生息する。水流中に半分没した石や落ち葉などにしがみついているか、河床の砂礫中から見つかる。藻類を食べているものと思われる。

【県内での生息状況】 飯能市中藤上郷を流れる入間川の支流「中藤川」の個体を基に新種記載された（Jäch et Díaz, 1999）。その後、旧両神村（現小鹿野町）の両神山にある昇竜の滝（豊田，2000a）や日高市の五常大滝、秩父市の中津川三国峠付近（埼玉県，2008）、同市大宮、皆野町三沢（新井ほか，2016）で記録されている。いずれの産地でも生息範囲が狭く、水路の護岸や滝周辺の観光地化等で容易に生息地が喪失してしまう可能性がある。

【特記事項】 本種を含む本属の種は外部形態がよく似ているため、同定にはオス交尾器の確認が必要である。

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ススキクシヒゲアリヅカムシ**

〔学　名〕 *Poroderus similis* (Sharp)

指定状況　－

【形　　態】 微小な種で、頭部の小顎髭は各節の外側に突起物を生じる。触角は先端に向かって太くなり、前胸背板基部と上翅端部には鱗片を密生する。雌雄共に後翅を持ち（野村・水野，2002）、飛翔能力が高い。色彩は全体が赤褐色。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯の河川敷や昭和初期まで利用されていた採草地の跡など、草原に生息し、ススキの大きな株の根元に溜まった落葉中から見出される。灯火によく飛来する（野村・水野，2002）

【県内での生息状況】 東松山市岩殿から県内では初めて記録され（新井・豊田，2000）、その後、旧川本町（現深谷市）の荒川河川敷からも記録された（新井ほか，2016）。ススキを主体とする草原環境が県内ではほとんど残っておらず、大規模河川の草原も外来植物による影響が大きいことから、今後産地が危機的な状況になることが予想される。

【特記事項】 和名がススキクチヒゲアリヅカムシから改称された（野村・水野，2002）。西日本で記録の多い種であり、関東ではほとんど得られていない。

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ドウガネアナバケハネカクシ**

〔学　名〕 *Syntomium japonicum* Y. Watanabe et Shibata

指定状況　－

【形　　態】 微小な種で、体型は細長く、触角は細く、先端3節は太い。前胸背板は幅広で楕円形に近く、腹部は最も幅広い。体表面は金属光沢があり、頭部、前胸背板、上翅には粗い点刻がある。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 山地帯の渓流沿いなど、湿度が年間を通して高く、岩や倒木の表面に厚く苔生した場所に生息する。

【県内での生息状況】 旧荒川村（現秩父市）日野の標高1,300 m附近で渓流沿いの苔中より得られたのが唯一の記録である（新井，2005a）。

【特記事項】

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ナミクシヒゲツヤムネハネカクシ**

〔学　名〕 *Quedius dilatatus* (Fabricius)

指定状況　－

【形　　態】 体長15～23㎜。体型は円筒形に近い。脚は太短い。頭部は発達し、強靭な大顎を持つ。触角は櫛髭状。前胸背板は円形に近い。上翅は短く、腹部は露出する。全身黒色で上翅肩部に小さな黄紋を持つ。頭部および胸部は強い光沢を持つ。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 雑木林等の落葉広葉樹林に生息し、樹液が出る木や腐った果実、閉鎖空間に営巣したスズメバチ類巣下の残渣中から発見される。

【県内での生息状況】 県内では台地・丘陵帯の嵐山町、低山帯の東秩父村、皆野町、秩父市、横瀬町、山地帯の秩父市大滝から記録されており（岩田，2006b；埼玉県，2008）、良好な落葉広葉樹林が残されている場所で確認されている。既知産地では大きな環境の変化は見られていない。ときがわ町と滑川町で新たに産地が発見されている（新井ほか，2016）。

【特記事項】 本種の幼虫はスズメバチ類の巣下残渣に生息し、スズメバチ類の死骸や食べ残しなどを食べて成長するという特異な生態を持つ（岩田，2010）。

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ミドリオオメツヤムネハネカクシ**

〔学　名〕 *Quedius* (*Raphirus*) *multipunctatus* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 8.5 ～ 9.0mm、体型は細長く、頭部は複眼が大きく発達し、前胸背板には 6 ～ 7 個の点刻列が 2 本ある。色彩は、頭部、前胸、上翅が金緑色の金属光沢を帯び、腹部は黒色、口器、触角、脚部は赤褐色。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 山地帯の渓流沿いなど、湿度が年間を通して高く、岩や倒木の表面に厚く苔生した場所に生息する。苔の中から見出されるほか、飛翔能力が高く、日中に沢沿いを飛び回る様子が観察される。

【県内での生息状況】 秩父市の武甲山や旧荒川村（現秩父市）の熊倉山（吉越ほか，1998）、飯能市の有間山、秩父市の雲取林道、駆ヶ越トンネル、雁坂トンネル附近のわさび沢（埼玉県，2008）、三峰山（新井ほか，2016）で記録されている。いずれの産地も山深い沢沿いの苔むした環境やその周囲である。

【特記事項】

科　名　ハネカクシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオヒョウタンメダカハネカクシ**

〔学　名〕 *Dianous shibatai* Sawada

指定状況　－

【形　態】 体長 4.9 ～ 5.4mm、体型は細長く、頭部は背面両側が縦に凹み、粗く点刻され、大顎、複眼は大きく発達する。前胸は縦長で表面は凸凹であり、粗い点刻を不規則に装い、上翅も点刻と皺による独特の文様がある。体色は黒色でやや緑色がかった金属光沢を帯びる。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 山地帯の渓流沿いなど、湿度が年間を通して高く、岩の表面に厚く苔生した場所に生息する。特に切り立った崖のような環境を好み、岩の隙間や苔の中から見出される。

【県内での生息状況】 旧両神村（現小鹿野町）の両神山清滝附近（豊田・新井，1999）で記録されたが、その後新たな記録はない。

【特記事項】

科　名　クワガタムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオルリクワガタ**

〔学　名〕 *Platycerus delicatulus delicatulus* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 9 ～ 12mm、体型は細長く、平たく、オスは大顎基部に長い歯がある。色彩はオスは青色の、メスは銅色の金属光沢を帯び、脚は通常は赤褐色で部分的に黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州（島原半島を除く）

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯の原生林等に生息し、成虫越冬で早春から梅雨の時期にブナやミズナラの樹木の朽木上で見出される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の川又、東大演習林、突出峠、豆焼沢、雁道場、旧十文字小屋、雁峠（吉越ほか，1998）、豆焼橋から八丁頭の間（新井，2011c）等の記録があるが、全て奥秩父の荒川源流に位置する高標高地とその周辺での記録である。

【特記事項】 九州の島原半島には別亜種のウンゼンオオルリクワガタ *P. delicatulus unzendakensis* が分布する。

科　名　クワガタムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ホソツヤルリクワガタ**

〔学　名〕 *Platycerus kawadai* Fujita et Ichikawa

指定状況　－

【形　　態】 体長 8 ～ 12mm、体型は細長く、平たく、オスは大顎基部が大きく湾入する。前胸は側縁が弧状で、後角がわずかに尖る。色彩はオスは濃青色の、メスは暗い金緑色の金属光沢を帯び、脚は通常は赤褐色で部分的に黒色。

【国内分布】 本州（富士山周辺と関東山地から南アルプス、長野県中部の山岳地帯）

【主な生息環境】 山地帯の原生林等に生息し、春先の芽吹きの時期に成虫が観察される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の霧藻山（佐野，1986）と中津川林道 1,100 m（柴田，1996）から記録されている。

【特記事項】

科　名　タマムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ウバタマムシ**

〔学　名〕 *Chalcophora japonica japonica* (Gory)

指定状況　－

【形　　態】 体長 24 ～ 40mm、体型は紡錘状で細長く厚味があり、複眼は発達する。上翅は、翅端附近の側縁がわずかに鋸歯状。体表面は点刻で覆われ、縦の無点刻の隆起による表面構造が見られる。また、表面は黄灰色の粉で覆われる。体色は赤銅色の金属光沢を帯びた黒色。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、マツ林とその周辺に生息し、マツ類の衰弱木に集まり、幼虫は材の内部を食害する。

【県内での生息状況】 かつて低地帯から秩父の山地帯まで広く分布し、記録も大変多いが（吉越ほか，1998）、マツノザイセンチュウによるアカマツ林の衰退により急激に産地が減少しつつある。その中でも、秩父の低標高地や滑川町での近年の記録（新井ほか，2016）があり、わずかながら各地で生息が続いているものと思われる。

【特記事項】

科　名　タマムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **アオマダラタマムシ**

〔学　名〕 *Nipponobuprestis amabilis* (Snellen van Vollenhoven)

指定状況　－

【形　　態】 体長 16 ～ 30mm、体型は紡錘状で細長く厚味がある。上翅は、翅端附近の側縁がわずかに鋸歯状。体表面は点刻と黄灰色の粉で覆われ、黄色の丸い紋を散布する。体色は青味がかった緑金色の金属光沢を帯びた黒色。

【国内分布】 本州（関東地方以西）、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけての森林に生息し、落葉広葉樹のサクラ類や常緑広葉樹のアオハダ、オガタマノキ、ツゲ等に集まり、幼虫は材の内部を食害する。

【県内での生息状況】 もともと分布の北限に近いこともあり、昔の記録は平地帯の旧大宮市（現さいたま市）がほとんどで、1980 年代に寄居町でも得られていたが（吉越ほか，1998）、温暖化の影響で近年記録が増えており、入間市（塩田，1999）、北本市（小堀，2000）、嵐山町（埼玉県，2008）、長瀞町、川越市（新井ほか，2016）の記録があるほか、インターネット上でも県内の写真が掲載されている。常緑広葉樹の植生自体は関東内陸部の北限は埼玉県内にあり、これらの森は急激に増えるものではないので、県内ではサクラ類に依存する個体が多いものと思われる。

【特記事項】

科　名　ホタル科
〔和　名〕 **スジグロボタル**
〔学　名〕 *Pristolycus sagulatus sagulatus* Gorham

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 7.0 ～ 9.1mm、体型は細長く、頭部は触角が鋸状で、前胸は側縁が平たく、上翅は条線が明らか。体色は黒色で、上翅は条線間が淡い赤色で「筋黒」の様相を呈す。

【国内分布】 北海道、本州、九州

【主な生息環境】 低山地から台地・丘陵帯にかけての谷津環境に生息し、流水附近の湿地周辺を日中飛翔する。幼虫は水中のカワニナ等水棲巻貝類を捕食する。

【県内での生息状況】 県南西部の飯能市から狭山丘陵周辺に分布し、極めて局所的である。所沢市三ヶ島（筑波大学昆虫調査班，1989、雛倉，1991）、飯能市（盛口，1992、同，1995）、狭山丘陵（埼玉県，1988）の記録があり、近年でも飯能市各地（蒔田ほか，2011）、所沢市の北野（千代田・関口，2014）、堀ノ内や日高市栗坪（新井ほか，2016）等の記録があるが、この地域以外からは知られていない。

【特記事項】 奄美大島には別亜種 *P. sagulatus adachii* が、四国には別種のシコクスジグロボタル *P. shikokensis* が分布する。

科　名　ジョウカイボン科
〔和　名〕 **カントウシリブトジョウカイ**
〔学　名〕 *Yukikoa watanabei* Takahashi

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 16.5mm、体型は細長く、頭部は大顎が発達し、触角は長く、前胸は横長で、上翅は後方に向けてやや広がる。メスはより幅広い体型で、腹部が上翅端から大きくはみ出る。体色は橙黄色。

【国内分布】 本州（秩父山地）

【主な生息環境】 山地帯の沢沿いの原生林環境に生息し、成虫は 6 月から 7 月に発生し、日中に林床を飛翔するほか、夜間灯火にも集まる。

【県内での生息状況】 副模式標本に旧大滝村（現秩父市）の中津川産の標本が含まれ（Takahashi，2003）、他に中津川渓谷大山渕（豊田，2000g、キイロシリブトジョウカイとして記録）、小赤沢（Okushima & Takahashi，2010 など）の記録があるが、いずれも原生林環境での記録であり、地域も奥秩父の最深部と限られる。

【特記事項】 従来キイロシリブトジョウカイとされていたものが細分化され（Takahashi，2003）、本種はワタナベシリブトジョウカイとも呼ばれる。

科　名　ケシキスイムシ科
〔和　名〕 **オオキマダラケシキスイ**
〔学　名〕 *Soronia fracta* Reitter

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 6.6 ～ 9.5mm、体型は細長く扁平で、前胸は前角が前方へ張り出し、上翅は肩より後方へ向けて狭まる。オスの前脚及び後脚脛節は中央付近で曲る。体色は暗褐色で、上翅後方には明色の紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、九州

【主な生息環境】 主に山地帯から低山帯の雑木林等に生息し、クヌギ等の樹液に集まる。昼間に活発に活動するが、夜間も活動する個体が見られる。

【県内での生息状況】 横瀬町の大野峠と東秩父村の高原牧場から記録され（豊田，2000b）、同地では毎年生息が確認されているが、今回新たに旧大滝村（現秩父市）の川又と秩父市久那、旧吉田町（現秩父市）の城峰山、皆野町の蓑山（新井ほか，2016）、さいたま市の秋ヶ瀬公園内でメス 1 頭が記録された（井上，2016b）。秋ヶ瀬の記録は周辺地域に記録が皆無であることから、河川上流部から増水時に漂着した個体の遇産の可能性もあり、今後詳細な調査が必要である。

【特記事項】

科　名　テントウムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ナカイケミヒメテントウ**

〔学　名〕 *Scymnus nakaikemensis* Sasaji et Kishimoto

指定状況　－

【形　　態】 体長 1.7 ～ 2.0mm。やや長い円形の体形で、全体橙黄色。前胸背板基部と上翅会合部前半にかけて黒色の紋があるが、個体により黒色紋は肩部にまで拡大する。

【国内分布】 本州（福井県、東海地方、関東平野）　日本特産種

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての低湿地に生息するが、確認地はきわめて限定的。

【県内での生息状況】 東松山市の九十九川流域（新井, 2004c）の生息地は耕地整備により消滅したが、その後、旧浦和市（現さいたま市）、旧庄和町（現春日部市）の湿地から確認されている（亀澤, 2010c）。

【特記事項】 福井県敦賀市の中池見湿地から発見されたが、その後、関東平野の湿地からも発見された。関東地方では渡良瀬遊水地が有名な産地だが、埼玉県側での発見例はない。近県ランク　神奈川：絶滅危惧Ⅰ類、群馬：絶滅危惧Ⅱ類、栃木：準絶滅危惧種。

科　名　テントウムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ムモンチャイロテントウ**

〔学　名〕 *Micraspis kurosai* Miyatake

指定状況　－

【形　　態】 体長 3.5 ～ 3.9mm、体型は丸く厚味があり、前胸は前角が前方へ張り出し、体表面は艶がある。色彩は橙黄色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけての低湿地や河川敷に生息し、局所的である。スゲが生える水気の多い湿地に見られることが多く、生息地では個体数も多い。

【県内での生息状況】 副摸式標本に上尾市大石産のメス１頭の標本が含まれ（Miyatake, 1977）、ほかに川口市東内野、旧浦和市（現さいたま市）大門、北本市石戸宿（吉越ほか, 1998）、日高市、東松山市、滑川町、嵐山町（埼玉県, 2008）の記録があり、今回の調査でも羽生市の宝蔵寺沼（林ほか ,2015）、東松山市大谷、川越市のびん沼川、春日部市の江戸川（新井ほか, 2016）が確認された。

【特記事項】 近隣の関東各都県では渡良瀬遊水地が有名産地である。

科　名　テントウムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ムナグロチャイロテントウ**

〔学　名〕 *Micraspis satoi* Miyatake

指定状況　－

【形　　態】 体長 3.2 ～ 3.4mm、体型は丸く厚味があり、前胸は前角が前方へ張り出し、体表面は艶がある。色彩は橙黄色で、前胸基部と小楯板、上翅会合部は黒色。

【国内分布】 本州

【主な生息環境】 低地帯の生息に好適な湿地に生息し、極めて局所的である。スゲが生える水気の多い湿地に見られる。ムモンチャイロテントウと同所的に見られることも多い。

【県内での生息状況】 東松山市毛塚から記録されたが（新井, 2005b）、この産地は埋め立てで消失し、その後、県内からは確認されていない。ムモンチャイロテントウが生息する環境を丁寧に調査することで、再発見が期待される。

【特記事項】 近隣の関東各都県では渡良瀬遊水地が有名産地である。

科　名　テントウムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **アイヌテントウ**

〔学　名〕 *Coccinella ainu* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 4.3 ～ 5.6mm、体型は丸く厚味があり、前胸は前角がやや前方に張り出す。体色は黒色で、頭部複眼内側、前胸前角附近、上翅小楯板附近に白色紋があり、上翅は赤色で 11 個の黒紋がある。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、主に河川敷に生息し、礫の河原で見つかることが多いものの、いずれの産地でも個体数が少ない。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の川又～滝川渓谷、大血川東谷、旧荒川村（現秩父市）日野、旧両神村（現小鹿野町）薬師堂、旧神泉村（現神川町）秩父瀬、寄居町赤浜、小川町の笠山、旧江南町（現熊谷市）押切、日高市武蔵高萩（吉越ほか，1998）、秩父市の下影森、中津川、深谷市の荒川河川敷と利根川河川敷（埼玉県, 2008）、長瀞町、秩父市の金室町、下影森、上野田（福原，2011）、秩父市小赤沢、下影森、久那、長瀞町上長瀞町、旧川本町（現深谷市）と記録がある（新井ほか，2016）。秩父市久那ではミゾソバに付くアブラムシを捕食する個体を複数観察した。

【特記事項】

科　名　ナガクチキムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **コモンホソナガクチキ**

〔学　名〕 *Phloiotrya trisignata* Nomura

指定状況　－

【形　態】 体長 9.5 ～ 16mm、体型は細長く筒状で、前胸は前方に狭まり、上翅は側縁が並行で翅端は細まる。体色は黒色で艶がほとんどなく、前胸前縁と基部の中央、上翅の中程と翅端附近の会合部に赤色紋がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯にかけて、原生林に生息し、ブナなどの巨木の立ち枯れや倒木に集まり、樹皮部に産卵する。日中は日の当らない部分に潜み、主に夜間活動する。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の十文字峠産の標本が副摸式標本となり記載された種で（Nomura，1958）、中津川（埼玉県，2008）でも記録された。

【特記事項】

科　名　ナガクチキムシ科

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ムネアカナガクチキ**

〔学　名〕 *Phryganophilus ruficollis rosti* Hubenthal

指定状況　－

【形　態】 体長 10 ～ 16mm、体型は細長く、頭部は触角が短い。前胸は幅広で前縁が丸く、上翅は密に点刻され、体表面には短い毛を密生する。体色は黒色で、前胸は燈黄色。

【国内分布】 北海道、本州、九州

【主な生息環境】 山地帯の森林に生息し、広葉樹の立ち枯れや倒木に集まる。

【県内での生息状況】 秩父産の詳細不明の古い標本が国立科学博物館の所蔵標本中にあり（埼玉県，2008）、これ以外にインターネット上の記録で横瀬町芦ヶ久保産の 2001 年 5 月 6 日に採集された 6 頭、飯能市の伊豆ヶ岳で同日に採集された 2 頭が掲載されている（吉崎ネット甲虫館，2001）。

【特記事項】

科　名　ナガクチキムシ科
〔和　名〕 **ボウズナガクチキ**
〔学　名〕 *Melandrya* (*Bonzicus*) *incostata* Fairmaire

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 10 ～ 17mm、体型は細長い紡錘形で、前胸は後角が後方へ尖り、体表面は艶があり微毛を密生する。体色は黒色で、脚の腿節は端部が燈黄色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯に生息し、クヌギやコナラ等の広葉樹の伐採木に集まり、シイタケ栽培の原木で観察されることもある。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の白岩山から古い記録がある（埼玉県立蕨高等学校生物クラブ, 1966）のみで、近年の記録は見当たらない。

【特記事項】 近隣では山梨県や静岡県では近年でも比較的多く採集されている。

科　名　ナガクチキムシ科
〔和　名〕 **オオナガクチキ**
〔学　名〕 *Melandrya dubia* Schaller

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 11 ～ 19mm、体型は細長く、厚味があり、前胸は中央とその両脇が大きく凹み、上翅は後方へ広がり、表面は隆条が明瞭。体色は黒色～黒褐色で艶があり、脚部はやや明るい。

【国内分布】 北海道、本州、四国

【主な生息環境】 山地帯の原生林に生息し、ブナなどの巨木の立ち枯れや倒木に集まる。日中は日の当らない部分に潜み、主に夜間活動する。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の中津川より記録され（新井, 2004c）、その後新たな記録は無い。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **ベニバハナカミキリ**
〔学　名〕 *Paranaspia anaspidoides* (Bates)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 8 ～ 14mm、体型は細長く、頭部は触角の各節が長く、鋸歯状にならない。前胸は後角が側方へ突出する。体色は黒色で、上翅は暗赤色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、森林に生息し、ケヤキ等の樹洞に依存しており、幼虫は洞内の腐朽部を食べて育つ。成虫はクリやガマズミ等の花に集まる。

【県内での生息状況】 旧大宮市（現さいたま市）の高鼻町、北本市石戸宿、毛呂山市大谷木、嵐山町菅谷で記録があり（吉越ほか, 1998）、嵐山町菅谷ではその後も確認されている（新井, 2005d）。また、嵐山町鎌形でも新たに記録された（新井ほか, 2016）。この地域は河川沿いにケヤキの古木が多く、本種の発生に好適環境と考えられる。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **クスベニカミキリ**
〔学　名〕 *Pyrestes munekuro* Fujimura

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長 14.5 ～ 19.0mm、体型は細長く筒状で、頭部は触角が鋸歯状で、前胸は横じわで覆われ、上翅は基部附近が点刻による皺状であり、側縁は並行。脚は短い。体色は暗赤色～黒色で、上翅はやや明るい赤色の個体が多い。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、主にクスノキやタブノキ等のクスノキ科に依存するが、それ以外の樹種も食すると思われる。成虫は春から夏季に出現し、花に集まるほか、クスノキ等の樹冠部を飛翔する姿が見られる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の川又、雲取山、秩父市の浦山冠岩、寄居町牟礼、越生町の黒山三滝、旧浦和市（現さいたま市）原山（吉越ほか, 1998）、嵐山町鎌形（新井, 2005d）等の記録があるが、平野部では特に局所的であり、神社等の照葉樹林に依存する傾向が見られる。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **アカアシオオアオカミキリ**
〔学　名〕 *Chloridolum japonicum* (Harold)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 25 ～ 30mm、体型は細長く、頭部は触角が長く、特にオスでは体長の 2 倍ほどに達する。前胸側縁には突起がある。体色は赤褐色で、頭部、前胸らなびに上翅は金緑色の金属光沢を帯びる。まれに赤味がかる個体もある。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、クヌギに依存しながらクヌギを主体とする雑木林に生息し、成虫は夏季に出現し、夜間樹液に集まる。

【県内での生息状況】 大宮台地を中心に低地帯に記録が多く（吉越ほか，1998）、近年の記録としては秩父市寺尾や嵐山町菅谷（新井ほか，2016）などがある。生息地が限定されるが、発生時期には比較的安定して確認されている。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **トラフカミキリ**
〔学　名〕 *Xylotrechus chinensis* (Chevrolat)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 17 ～ 26mm、体型は細長く、頭部は触角が短く、前胸は丸みを帯び、上翅は後方に狭まる。体色は黒褐色で、体全体に橙黄色と黒色の縞模様があり、前胸中央付近と肩部は暗赤色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低山地から低地帯にかけて、クワの木に依存することから桑畑や雑木林に生息し、成虫は夏季に出現し、日中にクワの木周辺で確認される。

【県内での生息状況】 山地帯の旧大滝村（現秩父市）から低地帯の羽生市まで広く記録があり（吉越ほか，1998）、近年では秩父市上影森での記録（新井ほか，2016）がある。かつては桑園にたくさん見られたようであるが、現在ではそのような状況は見られず、産地は確実に減っていると考えられる。

【特記事項】

科　名　カミキリムシ科
〔和　名〕 **シロスジカミキリ**
〔学　名〕 *Batocera lineolata* Chevrolat

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長 40 ～ 55mm、体型は細長く筒状で、頭部はオスの触角が長く、体長の 1.5 倍程、前胸は側縁に棘があり、前脚脛節は中央よりやや前方で内側に曲がる。体色は黒色で、灰色の微毛に覆われ、前胸に 1 対の縦紋、上翅に縦の斑状黄白色紋がある。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 山地帯から低地帯にかけて、クヌギやコナラ、カシ類、ヤナギ類に依存しており、それらのある雑木林や公園の街路樹、河川敷等に見られる。成虫は夏季に出現し夜行性で、樹液に集まる。幼虫は食樹生木のうち、比較的樹齢の若いものの幹内を食べる。老齢木に発生することは少ない。

【県内での生息状況】 山地帯の旧大滝村（現秩父市）から低地帯の川口市まで広く古い記録があるが（吉越ほか，1998）、その多くは低地帯の記録であり、現在では産地そのものが消失している場合が多い。近年では秩父市や小鹿野町、熊谷市、滑川町、嵐山町で記録されている（新井ほか，2016）。

【特記事項】 雑木林では、樹木の伐採更新が進まない状況にあり、各地で産地が減りつつある。逆に公園等の新たに植栽されたカシ類で発生するケースも見られ、今後の発生状況を注視する必要がある。

科　名　ハムシ科

〔和　名〕 **イネネクイハムシ**

〔学　名〕 *Donacia provostii* Fairmaire

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 6.0 ～ 7.5mm、体型は細長く、触角は長い。上翅端は幅広い裁断状。後脚腿節内側には長い歯がある。オスの腹部腹板第 1 節には中央に 1 対の瘤状隆起がある。色彩は褐色で、赤や緑、青、紫といった金属光沢を帯びる。触角は各節の基部が、脚部はほとんどが赤褐色。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 低山帯から低地帯にかけて、池沼や水田等に生息し、成虫は春から秋にかけて出現し、ハスやヒシ類、ガガブタ等の浮葉植物を食べる。

【県内での生息状況】 古い記録として寄居町末野、日高市、川越市の伊佐沼、桶川市川田谷、旧大宮市（現さいたま市）の深作沼の記録（吉越ほか，1998）があるが、これらの産地のほとんどが現在では生息は確認されず、近年では羽生市の宝蔵寺沼（林ほか , 2015）、滑川町山田（新井ほか，2016）等、わずかに局所的な産地が残る程度である。このため、新たに掲載種に加えたものである。

【特記事項】

科　名　イネゾウムシ科

〔和　名〕 **クロイネゾウモドキ**

〔学　名〕 *Notaris oryzae* (Ishida)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 5.3 ～ 6.0mm、体型は細長く、頭部は口吻が細長く伸び、先端付近に触角基部が位置する。上翅第 3 間室後方に灰色紋があり、体下面には一部に灰色鱗片がある。体色は黒色。

【国内分布】 北海道、本州、九州

【主な生息環境】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて、水辺に植物の生える池沼や河川に生息し、マコモ等の茎にしがみつくように水中にいることが多く、こうした植物の茎部を食べているものと思われる。稲の害虫として知られているが、実際には水田では発見されることは少ないようである。

【県内での生息状況】 旧妻沼町（現深谷市）俵瀬の利根川河川敷で記録され（豊田，2000b）、その後、嵐山町古里（新井，2005d）、羽生市の宝蔵寺沼（林ほか , 2015）でも記録されている。いずれもマコモやヒメガマの茎部からの採集例であり、県内にはこうした植生の残る環境が平地帯に点在することから、新たな産地が確認される可能性も考えられる。

【特記事項】

科　名　ミズスマシ科

〔和　名〕 **コミズスマシ**

〔学　名〕 *Gyrinus curtus* Motschulsky

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　EN

指定状況　－

【形　　態】 体長 4.9 ～ 5.6㎜の小型種。体型は卵型で幅広い。脚は黄褐色。背面は全体に黒色であり極めて強い金属光沢を持つ。上翅はやや隆起する。オス交尾器中央片は先端に向かって徐々に細くなるが、先端部は丸くなり尖らない。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、低地帯から台地・丘陵帯にある水質が良好に保たれた水生植物の豊富な湖沼やため池、砂防ダム、水田、河川の淀みなどに生息し、水面を群泳していることが多い。

【県内での生息状況】 県内では低地帯の旧大宮市（現さいたま市）、旧上福岡市（現ふじみ野市）、台地・丘陵帯の日高市、皆野町から記録されているが（吉越ほか，1998）、いずれも標本を実検できていないため本種かどうかの判断がつかない。近年の記録は全くなく、かつての分布状況についても情報が乏しく不明である。

【特記事項】 本種を含む日本産ミズスマシ属は近縁種が多く形態がよく似ているため、確実な同定にはオス交尾器を実検する必要がある。外部形態だけでは中間的な特徴を示す個体もおり同定は困難である。近年、全国的に激減している（環境省，2015）。

科　名　コガシラミズムシ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヒメコガシラミズムシ**

〔学　名〕 *Haliplus ovalis* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 4.0 ～ 4.3㎜。全体に太い体型で、前胸背板には縦条がない。上翅は点刻列を有する。体色は淡黄色。上翅は淡黄色を基調とし明瞭な黒紋を有する。上翅基部および会合部に黒条が発達することは少ない。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、主に湖沼やため池等に生息する。生息する湖沼では、岸際の水深が浅く水生植物が密生して生えている場所で見つかる。

【県内での生息状況】 県内では平野部のさいたま市（旧浦和市と旧大宮市）と台地・丘陵帯の日高市から古い記録が見られるが詳細は不明であり（吉越ほか，1998）、標本確認を含め、既知記録の精査と既知産地の詳細な調査が必要である。なお、近年の記録はなく、今回の調査でも追加記録は得られていないため詳細は不明。

【特記事項】 近似種のクロホシコガシラミズムシ *H. basinotatus* とは頭部や上翅の黒紋の発達具合により区別されるが、両種の中間的な斑紋パターンを示す個体もおり、1 頭のみでは同定が困難な場合もある。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **テラニシセスジゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Copelatus teranishii* Kamiya

指定状況　－

【形　態】 体長 4.8 ～ 5.5mm、体型は細長く扁平。体色は暗赤褐色で、上翅は基部が黄褐色を呈し、口器、触角、脚部は黄褐色。同定にはオス交尾器の形態を確認する必要がある（本種は交尾器中片先端が太く、直線的）。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 低地帯の河川周辺等にある日陰の水溜りや池沼周辺より得られているが局所的である。

【県内での生息状況】 古い記録として旧浦和市（現さいたま市）の田島ヶ原（梶村, 1961）からのものがあり、今回の調査で同所より 1990 年に得られたオス 2 頭、メス 1 頭の標本が確認された（新井ほか，2016）が、現在の生息状況は不明である。

【特記事項】 西日本には外見が大変良く似たカンムリセスジゲンゴロウ *C. kammuriensis* が分布するが、埼玉県にはこの種は分布せず、混同することはない。

科　名　ゲンゴロウ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　VU

〔和　名〕 **ヒメケシゲンゴロウ**

〔学　名〕 *Hyphydrus laeviventris laeviventris* Sharp

指定状況　－

【形　態】 体長 4.3 ～ 5.0㎜。体型は短卵型で、体高は著しく膨隆する。脚は比較的長い。上翅には大小 2 種の点刻を密に装う。体色は頭部と前胸で褐色、前胸背板前縁が暗色となる。上翅は暗黄褐色を基調とし発達した黒色紋を装う。腹面および脚は黄褐色。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 止水性であり、低地帯から台地・丘陵帯の水質がよく比較的貧栄養で、かつ、水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地などに生息し、浅瀬で見られる。

【県内での生息状況】 県内では旧児玉町（現本庄市）の古い記録が唯一であり（吉越ほか，1998）、標本の確認を含め精査が必要である。追加記録や新産地が見つかっておらず県内の生息状況については不明な点が多い。全国的に減少傾向が著しく、残存していても県内の生息状況は厳しいと考えられる。

【特記事項】 前述のケシゲンゴロウよりも環境選好が厳しい種のようであり、本種の方がより良好な水辺環境で確認されることが多く、分布も局地的である。

科　名　ガムシ科

〔和　名〕 **マルヒラタガムシ**

〔学　名〕 *Enochrus subsignatus* (Harold)

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　NT

指定状況　－

【形　　態】 体長 4.8 ～ 5.0㎜。体型は円形で盛り上がる。上翅は密に点刻され、不鮮明な縦長の紋を有し、会合部には赤褐色の帯が発達する。中胸腹板が板状に隆起し、前角に歯を備える。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 止水性であり、低山帯から低地帯までの水生植物の豊富な湖沼やため池、水田、休耕田、湿地、河川敷の溜まりなどに生息する。特に浅瀬や岸際の植物の多い地点から得られることが多い。

【県内での生息状況】 県内では小鹿野町合角からの記録が知られるが（長島・谷口，1992；長島，1996）、その後に追加記録はなく新たな産地は見つかっていない。県内の生息状況については不明な点が多く、前述の記録の基となった標本についても再検討が必要と考えられる。

【特記事項】 本種を含めた小型の止水性ガムシ科については全国的に減少の著しい種が複数知られているが、特に生活史や生息環境、環境選好に関する研究が不十分であり、減少の原因が不明なものが多い。

科　名　ガムシ科

〔和　名〕 **シジミガムシ**

〔学　名〕 *Laccobius bedeli* Sharp

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　EN

指定状況　－

【形　　態】 体長 2.9 ～ 3.2㎜。体型は円形で盛り上がる。上翅に点刻列を有する。体色は頭部および前胸背板が黒褐色、前胸背板の側縁が黄褐色となる。上翅は黄褐色を基調とし、点刻列周辺は黒褐色となる。オス交尾器側片先端部に棘を欠く。

【国内分布】 北海道、本州、九州（東日本の記録については疑問が残る）

【主な生息環境】 止水性であり、比較的水深が深く（50㎝～１m程度）水生植物の豊富な比較的大きい湖沼やため池に生息する。他のシジミガムシ属の種と比較して一生息地あたりの個体密度が低いといわれる。

【県内での生息状況】 県内では低地帯から山地帯にかけての記録が見られるものの、これらは誤同定を含む可能性が高く、標本に基づいた再検討の必要がある。比較的最近記録されたシジミガムシ属の標本には本種は含まれておらず（新井・岩田，2011），県内分布については疑問がある。

【特記事項】 本種を含むシジミガムシ属の多くの種は外部形態が非常に似ており、オス交尾器の精査を実施することにより種名を確定する必要がある。

科　名　クワガタムシ科

〔和　名〕 **マグソクワガタ**

〔学　名〕 *Nicagus japonicus* Nagel

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 8.0 ～ 9.5mm、体型は細長く、頭部は触角先端３節が櫛状に発達し、前胸は側縁が鋸歯状で、前方に強く狭まる。上翅は側縁がほぼ平行で、前胸と同様に鋸歯状。背面はオスは棘毛で密に、メスは短毛で疎に覆われる。色彩はオスが褐色、メスが赤褐色でやや暗い。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 山地帯の河川周辺に生息し、春先の日中、天気の良い日に限り砂地の地表付近を飛び回る。幼虫は砂地に半分埋没した流木から見出される。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の中津川からオス１頭の記録（新井，2004c）が唯一である。生息地でのその後の調査では再発見されていないが、生息環境は維持されている。

【特記事項】

科　名　アカマダラセンチコガネ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕**アカマダラセンチコガネ**

〔学　名〕*Ochodaeus machulatus* Waterhouse

指定状況　－

【形　態】体長 6.4 ～ 11.0mm、体型は丸く、厚味があり、頭部は大顎と複眼が発達し、触角は先端が丸く、体表面は長毛で覆われる。体色は黒色で、前胸、上翅の大半と中、後脚腿節、触角端部は黄白色。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】山地帯から台地・丘陵帯の森林に生息し、春から晩秋にかけて、日中から夕方に林縁など開けた環境で地表付近を素早く飛び回る。また、草地の地表部に土盛りを形成し、その下に潜んでいることもある。

【県内での生息状況】寄居町折原（寄居町にトンボ公園を作る会，1996）、秩父市大滝（埼玉県，2008）の 2 例が知られている。

【特記事項】関東各都県では千葉県や神奈川県で記録が多い。

科　名　タマムシ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕**キンヘリタマムシ**

〔学　名〕*Lamprodila pretiosa bellula* (Lewis)

指定状況　－

【形　態】体長 8 ～ 13mm、体型は紡錘状で細長く扁平。触角第 4 節は第 2 節とほぼ等長、体表面は密に点刻で覆われ皺状。体色は青味がかった緑金色の金属光沢を帯び、側縁は赤味を帯びて、黒藍色の斑模様がある。

【国内分布】北海道、本州、四国

【主な生息環境】山地帯に生息し、ハルニレに依存しており、梅雨から夏の時期にハルニレの枯れ枝、衰弱木、伐採木に集まる。

【県内での生息状況】川島町の白井沼の記録（斎藤，1978）が唯一であり、藤多（1995）の記録もこの引用である。現地調査では、周囲にハルニレは自生しておらず、水田と民家が散見されるだけの平坦な環境であり、遇産か、誤同定である可能性が高い。

【特記事項】隣接する長野県には同じくハルニレに依存するハビロキンヘリタマムシ *L. nipponensis* が分布しており、県内ではむしろこの種の方が生息する可能性がある。

科　名　カミキリムシ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕**イワワキセダカコブヤハズカミキリ**

〔学　名〕*Parechthistatus gibber shibatai* Miyake

指定状況　－

【形　態】体長 10.5 ～ 18mm、体型は長く、頭部はオスの触角がとても長く、体長の 3 倍ほど。上翅は肩部後方より隆起して角張り、翅端は細まり棘状、基部には黒色の瘤を欠き、後翅は退化するため飛翔能力を欠く。体色は全体が褐色。

【国内分布】本州（関東中部の太平洋側から近畿地方にかけての範囲の山岳地帯）

【主な生息環境】亜高山帯から山地帯にかけてのブナを主体とする森林とその周辺に生息し、林床の落葉中や倒木上に見られる。

【県内での生息状況】旧大滝村（現秩父市）の白岩山から雲取山の間で夏季に得られた記録（埼玉県立蕨高等学校生物クラブ，1964）が唯一である。

【特記事項】直線距離で 5km 程度の東京都奥多摩の天祖山や日原での記録があり（吉越ほか，1998）、県境付近にわずかながら局所的な分布をする可能性が高い。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **ホソアカガネオサムシ**

〔学　名〕 *Carabus vanvolxemi vanvolxemi* Putzeys

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 19 ～ 26mm、体は細長く厚味があり、前胸背板は後角が後方へ突出する。後翅は縮小し飛翔能力を欠く。色彩は全体が黒色で赤味がかった鈍い金属光沢を帯びる。

【国内分布】 本州（東日本）

【主な生息環境】 山地帯から亜高山帯にかけての原生林や二次林の林床に生息し、林床がスズタケ等の草本や苔類で覆われた湿潤な環境を好む。地中が礫により形成され、湿度が高く冷温で間隙のある箇所で得られることが多い。越冬は朽木内等で行われる。

【県内での生息状況】 標高 1,000 m以上の山地帯に限って生息し、小鹿野町（志賀坂峠）や旧大滝村（現秩父市、三峰山から雲取山にかけての稜線沿い）でわずかに記録があるが（吉越ほか，1998；豊田，2000e）、志賀坂峠周辺は乾燥化が進み現在では生息が確認できない状況である。

【特記事項】 本州の主に長野県よりも東側の山岳地帯に分布し、関東では本県のほか、神奈川、東京、山梨、群馬、栃木の各都県に生息する。秩父山地は本種の連続する分布域の南限に位置する。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **ホソヒメクロオサムシ奥秩父亜種**

〔学　名〕 *Carabus harmandi okutamaensis* Ishikawa

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 16 ～ 23mm、体は細長く厚味があり、前胸は細く、体表面は細かい皺に覆われ、肩は細く、後翅は縮小し飛翔能力を欠く。体色は全体が黒色。

【国内分布】 本州（秩父山地から奥多摩山地周辺にかけての範囲）

【主な生息環境】 山地帯から亜高山帯にかけての原生林や二次林の林床に生息し、林床がスズタケ等の草本や苔類で覆われた湿潤な環境を好む。地中が礫により形成され、湿度が高く冷温で間隙のある箇所で得られることが多い。越冬は朽木内等で行われる。

【県内での生息状況】 古くより旧大滝村（現秩父市）の標高 800 m以上の尾根沿いを中心に記録されており、生息地における個体数は決して少なくない。しかし林道の設置や大型重機等を用いた大規模な伐採、あるいはニホンジカによる林床の食害等により山全体が乾燥化する傾向にあり、生息環境は安泰とは言い難い。

【特記事項】 本種自体は本州の琵琶湖以西の東日本に分布するものであり、現在、13 亜種に細分化されており、オクタマアルマンオサムシとも呼ばれる秩父山地の亜種は、他の地域とはほぼ隔絶された分布となっている（井村・水沢，2013）。

科　名　オサムシ科

〔和　名〕 **コクロナガオサムシ奥秩父亜種**

〔学　名〕 *Carabus arboreus ogurai* Ishikawa

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　　態】 体長 18 ～ 25mm、体は細長く厚味があり、前胸は細く、体表面は艶が無い。肩は細く、後翅は縮小し飛翔能力を欠く。体色は黒色で、後翅はやや赤味を帯びる。

【国内分布】 本州（群馬県南部から山梨県東部にかけての範囲）

【主な生息環境】 山地帯から亜高山帯にかけての原生林や二次林の林床に生息し、林床がスズタケ等の草本や苔類で覆われた湿潤な環境を好む。地中が礫により形成され、湿度が高く冷温で間隙のある箇所で得られることが多い。越冬は朽木内等で行われる。

【県内での生息状況】 古くより旧大滝村（現秩父市）の標高 950 m以上の尾根沿いを中心に記録されており、生息地における個体数はけっして少なくない状況で、2,000 m附近になると普通種となる。しかしながら林道の設置や大型重機等を用いた大規模な伐採、あるいはニホンジカによる林床の食害等により山全体が乾燥化する傾向にあり、生息環境は安泰とは言い難い。

【特記事項】 本種自体は本州の紀伊半島以東の東日本から北海道とその周辺の島々にかけて分布し、現在 20 亜種に細分化されており、チチブホソクロナガオサムシとも呼ばれる本亜種は周辺地域の亜種と隣接して分布している（井村・水沢，2013）。

科　名　オサムシ科

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オンタケナガチビゴミムシ**

〔学　名〕 *Trechiama lewisi* (Jeannel)

指定状況　－

【形　態】 体長 6.2 ～ 7.0mm、体型は細長く、頭部は複眼が縮小せず、前胸は心臓形で上翅は肩がなだらかで長円形、後翅は縮小し飛翔能力を欠く。体色は全体が濃赤褐色で上翅には虹色光沢がある。

【国内分布】 本州（中部山岳地帯の亜高山帯）

【主な生息環境】 亜高山帯の稜線沿いから沢沿いにかけて生息し、地中の間隙や石下において観察される。湿り気の多い環境を好み、流水附近にて良く見つかる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の十文字峠（笠原，1990）や大血川の大日向、入川の真ノ沢、雁坂峠付近の黒岩尾根で記録（新井，2016 など）されており、沢沿いの原生林が残る環境では標高 1,600 m以下の山地帯に位置する場所でも生息しているようである。分布の中心は県境付近の尾根沿いにあると思われる。

【特記事項】 地域によりオス交尾器等の形態に変異が認められること、地理的に隔離された分布状況であることから、秩父山塊の個体群と他の地域の個体群は将来的に細分化される可能性もある。

科　名　シデムシ科

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ホンドヒロオビモンシデムシ**

〔学　名〕 *Nicrophorus investigator latifasciatus* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 15 ～ 22mm、体型は細長く、前胸は背面中央と前方の横方向に明瞭な線刻がある。色彩は、上翅に 4 つの赤色紋があり、前方 2 つは会合部でつながり、後方もほぼつながった状態で、いずれも幅広い横紋状。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯にかけて分布するが、夏季は冷涼な亜高山帯で活動し、秋季になると山地帯まで降りてくると考えられる。動物の死骸や糞などに集まる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の中津川山（野沢，1989）、同中津川渓谷広河原沢（豊田，2000d）、秩父市の大血川（埼玉県，2008）、同大滝入川渓谷赤沢出合付近（安保，2015）とわずかな記録があるが、これらはいずれも低標高地に降りてきた個体と思われ、本来の生息域が亜高山帯であることから、県内での生息箇所は限られる。

【特記事項】 北海道には基亜種が分布する。

科　名　シデムシ科

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヒメモンシデムシ**

〔学　名〕 *Nicrophorus montivagus* Lewis

指定状況　－

【形　態】 体長 10 ～ 17mm、体型は細長く、前胸は背面中央と前方の横方向に明瞭な線刻があり、上翅は全体がほぼ同幅。体色は、肩部から中央前方にかけて 1 対、翅端附近に 1 対の不規則な形状の赤色紋があり、個体により頭部前方に赤色部がある。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 主に亜高山帯に生息し、秋季など気温が下がる時期には低山帯まで降りてくるようである。動物の死骸や糞などに集まる。

【県内での生息状況】 旧大滝村（現秩父市）の三峰山大陽寺の記録（吉越，1996）が唯一であり、その後生息は確認されていない。分布の主体が亜高山帯のため、生息域は限られるものと思われる。

【特記事項】

科　名　シデムシ科

〔和　名〕 **ヒメクロシデムシ**

〔学　名〕 *Nicrophorus tenuipes* Lewis

埼玉県(2018)	LP	環境省(2015)	−
指定状況	−		

【形　態】 体長 14 ～ 23mm、体型は細長く、前胸は背面中央と前方の横方向に明瞭な線刻があり、上翅はわずかに竜骨状の明瞭な条線が 2 本ある。腹部は翅端から飛び出る。体色は全体が黒色。

【国内分布】 北海道、本州（高地のみ）

【主な生息環境】 亜高山帯から山地帯に生息し、秋季など気温が下がる時期には低山帯まで降りてくるようである。動物の死骸や糞などに集まる。

【県内での生息状況】 皆野町門平、秩父市橋立、旧大滝村（現秩父市）の雲取山と雁坂峠～突出峠の記録があり（吉越ほか，1998）、雁坂峠付近では追加記録されている（雛倉，1999）。また、秩父市の十文字峠（新井ほか，2016）の記録もある。分布の主体が亜高山帯のため、生息域は限られるものと思われる。

【特記事項】 久喜市（江村，1989）と狭山市（狭山市，1989）は別の種の誤りと思われる。